

県営圃場整備事業(昭和50年度)

埋蔵文化財緊急発掘調査報告

# 唐 澤 城

1976

長野県上伊那郡飯島町教育委員会  
南信土地改良事務所



「唐沢城」正誤表

頁段行

正

誤

序上6

上杉定実

上杉定美

4上13

飯島城

本郷城

4上16

新井の城とも

新井の城と

4上16

上杉定実

上杉定美

4上18

断絶する

断続する

23下5

飯島城（本郷城とも言う）

本郷城（飯島城とも言う）

24上5

片桐次郎太夫為綱

片桐二郎太夫寿綱

## 序

飯島町は、昭和48年8月より全町におよぶ県圃事業を行なっている。この鳥居原新井地籍唐沢城址の緊急発掘調査も、それに関連して南信土地改良事務所の委託によって、昭和50年度事業として実施したものである。

この地は、西方遙かに南駒の霊峰を仰ぎ、北は郷沢川、南は唐沢洞、東は天竜川の清流を俯瞰する段丘崖上に展開する風光明媚の地である。

今から440余年前、天文3年上杉定美の臣、箕輪中条の領主隼人助、源昌綱の男、唐沢備前義景この地に館を備えて在城し、弘治2年、武田信玄伊那侵略の際に断絶するまで、22年間の城址である。

昭和3年、県道日曾利線開さく工事の折、焼米・雑穀が多量に出土している。同28年館址南方塁壁除去の際、土中より古鏡が出土し、同44年春耕地区画整理の折、中国の開元通宝・熙寧元宝・大平通宝等の古銭が出土し、現存しているが、この度の発掘調査は、これ等を更に深く立証し、大いに効果をおさめえた。

この調査結果として、室町時代の住居址三軒、土壇五ヶ所、柱穴址三ヶ所、溝、配石等が検出され、外堀の断面も確実に把握した。尚室町時代・桃山時代の陶器、古銭、鉄製品等が多数検出され、中国との貿易関係を示す貴重な資料として、画期的な効果を上げることができた。

この調査にあたっては、団長に友野良一先生、調査員に伊藤修氏、補助員に宮下静男、大沢初両氏をお願いして調査団を編成し、内堀と外堀との間の発掘調査を実施したわけですが、調査団の先生方のご努力と、鳥居原・石曾根の皆様のご協力とによって、無事終了でき、まことに喜びにたえません。

ここに調査報告書を発刊するにあたって、南信土地改良事務所をはじめ、県教育委員会・調査団の諸先生・地元町民の皆様に、改めて深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和51年3月10日

飯島町教育委員長 北原健三



# 目 次

序	
凡 例	
目 次	( 1 )
挿図目次	( 2 )
図版目次	( 2 )
第 I 章 環 境	( 3 )
第 1 節 位置と自然環境	( 3 )
第 2 節 歴史的環境	( 4 )
第 II 章 発掘調査の経過	( 5 )
第 1 節 発掘調査に至るまで	( 5 )
第 2 節 調査日誌	( 5 )
第 III 章 遺 構	( 9 )
第 1 節 住居址	( 9 )
第 2 節 土  墳	(10)
第 3 節 柱 穴 址	(12)
第 4 節 そ の 他	(14)
第 IV 章 遺 物	(16)
第 1 節 唐沢城以前の遺物	(16)
第 2 節 陶磁器、内耳土器	(16)
第 3 節 古銭、金属製品、砥石	(16)
第 4 節 自然遺物(出土穀類)	(17)
第 V 章 所 見	(23)
自然遺物と鉄鎌について	(25)

# 凡 例

1. この調査は、圃場整備事業に伴う緊急発掘調査で、調査は南信土地改良事務所の委託により飯島町教育委員会が実施した。
2. 本調査は、50年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述はできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
3. 本報告書の執筆者図版作製者は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明らかにした。  
友野良一、向山雅重、宮下静男、森谷栄一、箕浦税夫、伊藤修、小林喜美江、宮下喜代子
4. 出土陶器の判別については、瀬戸市立窯業民俗資料館長宮石宗弘先生に、出土穀類については信州大学農学部松沢盛茂教授、氏原暉男助教授、俣野敏子助教授に御教示をいただいた。
5. 出土陶器、穀類は、飯島町教育委員会に保管されている。



## 挿 図 目 次

第1図	位 置 図 (1:150,000) .....	(3)
第2図	上伊那郡南部の城塞分布図 .....	(4)
第3図	地 形 図 (1:1,000) .....	(6)
第4図	遺構配置図 (1:600) .....	(8)
第5図	第1号住居址 (1:80) .....	(9)
第6図	第2号住居址 (1:80) .....	(9)
第7図	第3号住居址 (1:80) .....	(10)
第8図	第1号土壙とその付近 (1:80) .....	(10)
第9図	第2号土壙 (1:40) .....	(11)
第10図	第4号土壙 (1:40) .....	(11)
第11図	第5号土壙及び第1号柱穴址 (1:40) .....	(12)
第12図	第2号柱穴址 (1:80) .....	(13)
第13図	第3号柱穴址 (1:80) .....	(13)
第14図	配 石 址 (1:80) .....	(14)
第15図	集 石 (1:60) .....	(14)
第16図	溝状遺構 (1:180) .....	(14)
第17図	外堀断面 (1:120) .....	(15)
第18図	弥生時代各地古代米と唐沢城址及び台城遺跡出土米との形態比較 .....	(18)
第19図	出土穀類の形態変異と現在品種との比較 .....	(18)
第20図	陶 磁 器 (1:3、1:4) .....	(26)
第21図	陶 磁 器 (1:3) .....	(27)
第22図	古銭、金属製品、砥石 (1:2) .....	(28)
図 版	炭化穀類、現在品種との比較 .....	(19)
表 1 表	出土陶器一覧表 .....	(20)

## 図 版 目 次

図版第1	航空写真
図版第2	唐沢城遠景(東より)
図版第3	唐沢城遠景(北より)、唐沢城より天竜川を望む
図版第4	主郭部・南区、北区
図版第5	第1号住居址、第2号住居址
図版第6	第3号住居址・第3号土壙、第1号土壙とその付近
図版第7	第2号土壙、第4号土壙
図版第8	第5号土壙、第5号土壙炭化穀類・炭化木材出土状態
図版第9	第1号柱穴址、第2号柱穴址(第3住、第3土壙、配石を含む)
図版第10	第3号柱穴址、配石
図版第11	集石、溝状遺構
図版第12	外堀(北より)、外堀断面調査
図版第13	記念撮影、外堀断面調査、測量風景
図版第14	遺物出土状態
図版第15	陶 磁 器
図版第16	陶 磁 器
図版第17	陶 磁 器
図版第18	陶 磁 器
図版第19	陶 磁 器
図版第20	古銭、金属製品、砥石

# 第I章 環 境

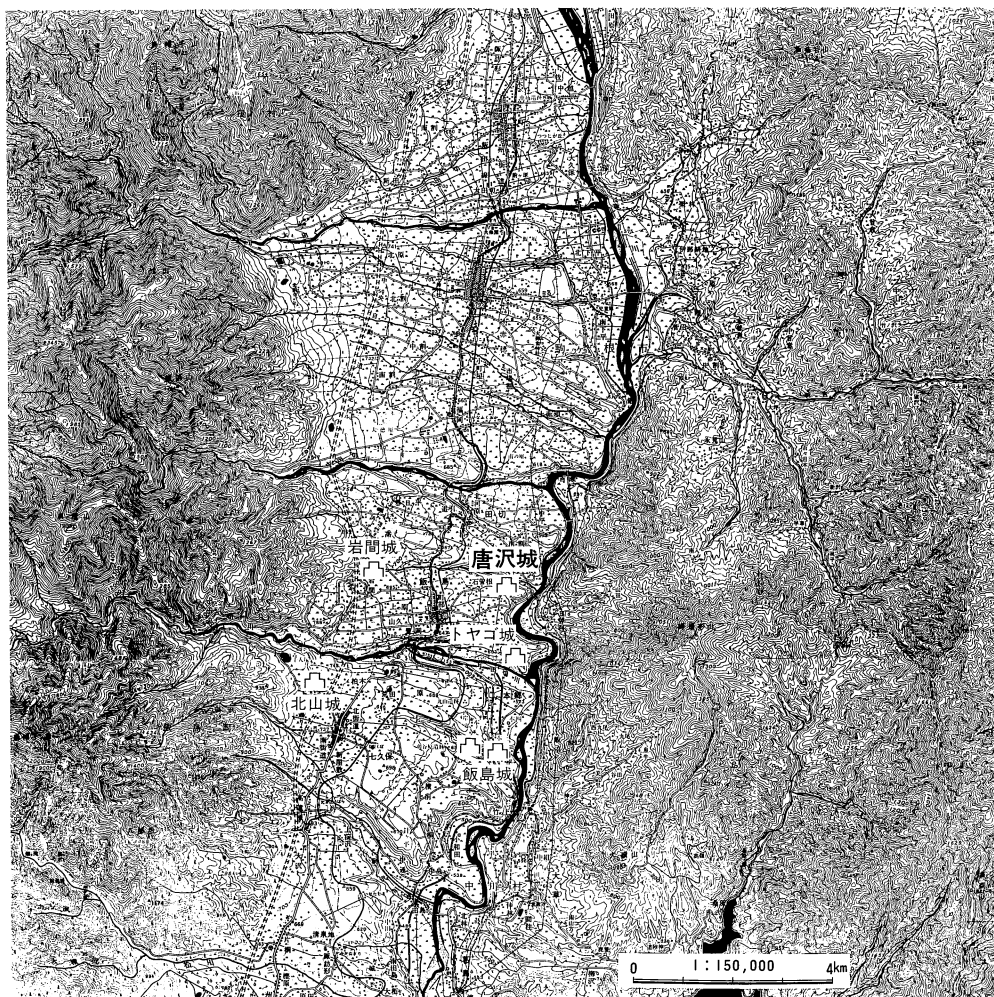
## 第1節 位置と自然環境

唐沢城は長野県上伊那郡飯島町鳥居原 919 番地に所在する。城は飯島区の北東端に位置し、天竜川の河岸段丘の先端にあたる。城に至るには、国鉄飯田線飯島駅で下車し、駅から東に向って1.5kmほど歩き、更に北東に500mほど入ればよい。

木曾山脈と赤石山脈に挟まれた伊那谷は一口に南北に細長い縦谷状地形といえる。この中央部を天竜川が南流し、天竜川に向って西の木曾山脈、東の赤石山脈に源を發する中小河川が流れ込んでいる。これらの中小河川は山麓にいくつもの扇状地を形成したが、その後の隆起運動により、これらの扇状地を自ら侵食していった。

飯島町は、中田切川・与田切川・日向沢川等の中小河川の侵食、堆積作用により扇状地が発達している。唐沢城は、扇状地の先端、天竜川の河岸段丘上に位置している。城の東側・南側は、比高約60mの段丘崖であり、北側もやはり、郷沢川により侵食された段丘崖となっている。西側は、中央アルプスから広がる、ゆるやかな扇状地となっている。城の標高は、主郭部で590m、調査地区中央部で593mを計る。

調査地区内の土層は、ローム層上に褐色土層、黒褐色土層、耕作土の順で堆積していた。遺構は褐色土層より掘り込み、ローム層まで達している。また唐沢城の東の段丘崖には、地層の露出している部分が見られるが、それによれば、ローム層の下に数mの礫層、更に砂礫層と続いている。(伊藤 修)



第1図 位置 図

## 第2節 歴史的環境

中世において、上伊那地方には大小の豪族が時代的にも地域的にも割拠しており、それにこの地方特有の複雑な地形もつだって各種多様の城塞遺跡がみられる。これらの城塞遺跡には武士の居館、戦争のための砦、狼煙台、物見台などがある。

南北朝から室町時代になると、武士団の成長に伴い城は砦と居館の両方の性格を兼ね備えるようになり、規模も拡大していった。そして城を中心に素朴ではあるが城下町も形成されるようになった。上伊那地方における中世の城は、地形の上から山城、平山城、平城の三種類に分けられる。山城は山の頂きなどに軍事的な目的により築かれた場合が多い。平時の生活には不向きであり、山麓の平地に居館や集落が見られる。平山城は上伊那地方特有の河岸段丘を利用し、その先端に築かれている。段丘上でみると平城であるが、天竜川の低地よりみれば平山城といえる。また段丘崖に対し反対側には空堀がみられる。平城は平地に構築された城である。防備力は弱く中世においては非常に少ない。

上伊那郡南部の城塞の分布をみると第2図のようになり、天竜川付近の河岸段丘上に、天竜川へ流れ込む中小の河川を利用し城の区画をつくり、平山城として構築している例が多い。この主なものをあげれば北より菅沼城、赤須城、トヤゴ城、本郷城、大草城、葛島城、船山城などがあげられる。唐沢城も天竜川、郷沢川の河岸段丘を利用してつくられた平山城といえる。

唐沢城の歴史については、伊那温知集、伊那武鑑根元記などにのべられている。伊那温知集或いは系譜によれば、「天竜川端新井という所に唐沢備前の居館があり新井の城という。天文3年、上杉定美の臣箕輪中条の領主神奈隼人助昌綱の男唐沢備前義景ここに移り館を構えて居住する。弘治2年、武田信玄伊那侵入の際、撲滅一掃するに及んで取没終に断続する」とある。また伊那武鑑根元記によれば、その後「武田氏の臣小泉五郎左衛門知行参百貫文を領して居館を構える。天正10年織田氏打入りの時、高遠城にて父子共討死し、この時家名を失う」とある。

唐沢城の発掘調査以前の状況について、主郭部（A地区）、調査地区（B地区）、その外側（C地区）に別けて説明してみたい。

### A地区

- (1)主郭部の西側に深さ約10mの空堀（内堀）が存在していた。明治の中頃と昭和28年の耕地拡張の際に埋め立て平坦としたが、堀の両端には現在も僅かに空堀の痕跡がみられる。
- (2)主郭部の北側、南側の段丘端には、高さ80cm～2mの土塁がみられたが、これも耕地拡張工事の際に大部分取り去られ、現在、北側の一部に僅かにみられる。
- (3)主郭部の東方に2箇所、北方に1箇所斜面を均した跡がみられる。付近より武具の破片、米、粟などの炭化物が出土したとの話である。
- (4)主郭部の南東の斜面と北側の斜面に集石がみられる。礫は戦闘に使用するために要所要所に備え、正月等に家臣が登城する際には必ず礫を何個づつか持参した習慣があったと伝えられている。
- (5)主郭部の東北の隅に稲荷大明神が祀られている。
- (6)主郭部の開墾の際に槍先、刀剣、武具、古銭等が出土した。家へ持ち帰ると悪病にかかるとの迷信があり、稲荷大明神付近に置き去りにしたとの云い伝えがある。また昭和28年南側の土塁の取り除きの際、和鏡が出土した。主郭部東方の斜面より、米、粟などが出土したと伝えられている。

### B地区

- (1)調査地区の西側に空堀（外堀）が存在した。明治以前の開田の際、耕地として埋め立てられ現存しないが堀の両端の段丘斜面にその痕跡がみられる。
- (2)南方傾斜面に矢竹の自生地があり、付近にも点在している。

### C地区

- (1)唐沢城攻撃の際、最後の激戦地と云い伝えられる石曾根東原地籍に石碑が一基あり、現在でも供養が続けられている。
- (2)付近には片見山、矢東、火打垣などの地名がある。（宮下静男）



第2図 上伊那郡南部の城塞分布図(上伊那誌より)



唐沢城址石碑



## 第II章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまで

県営圃場整備事業田切地区第6工区にある埋蔵文化財の調査として、唐沢城址の発掘調査を南信土地改良事務所から委託を受け行なった。発掘調査に至る経過を簡略に記してみる。

**昭和50年11月** 南信土地改良事務所長から発掘調査協議の依頼がある。  
**昭和50年12月5日** 長野県教育委員会桐原主事来町。南信土地改良事務所・農林課・飯島町教育委員会を交えて協議を行ない予算額を算出する。南信土地改良事務所長と委託契約を締結する。

#### 〔発掘調査団〕

団長	友野良一	日本考古学協会々員
調査員	伊藤修	飯島町教育委員会
調査補助員	宮下静男	飯島町文化財調査委員
〃	大沢初	飯島町郷土研究会々員
整理作業	宮下喜代子	飯島町

#### 〔調査事務局〕

事務局	織田正巳	飯島町教育長
〃	森谷栄一	飯島町教育次長
〃	箕浦税夫	飯島町教育委員会主事
〃	片桐文子	〃

(森谷、箕浦)

### 第2節 調査日誌

**12月10日** 本日より調査を開始する。ブルドーザーにより水田の耕作土を削り取る。数箇所、試掘をする。

**12月11日** 本日もブルドーザーで耕作土を削り取る。外堀の輪郭を確認する。グリットを設定する。遺物は陶器片数片が出土しただけである。

**12月12日** 外堀より内側を数グリット調査する。溝が検出される。また、外堀の中央付近より内堀へ向う堀も確認される。

**12月13日** グリットによる調査を行なう。遺物は、地場付近に多い。

**12月14日** 南側へ調査地区を移動する。遺物の出土は比較的多い。

**12月15日** 第1号、第2号住居址、第1号柱穴址、第2号柱穴址、集石が検出される。

**12月16日** 第3号住居址、第1号土壇、第2号土壇、第3号土壇、第4号土壇、第3号柱穴址が検出される。

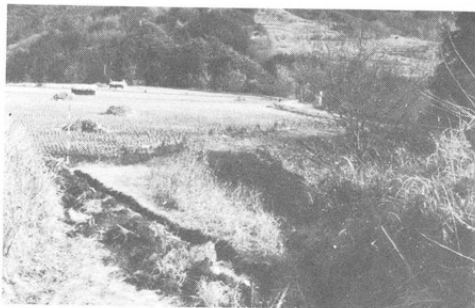
**12月17日** 第5号土壇、配石が検出される。第1・2・3号住居址の覆土を取り除く。遺物は床面よりも覆土に多い。

**12月18日** 全遺構の覆土を取り除きながら調査を進める。

**12月19日** 全遺構の清掃・写真撮影を行なう。

**12月20日・21日** 遺構測量

**12月22日～24日** 全体測量、地形測量



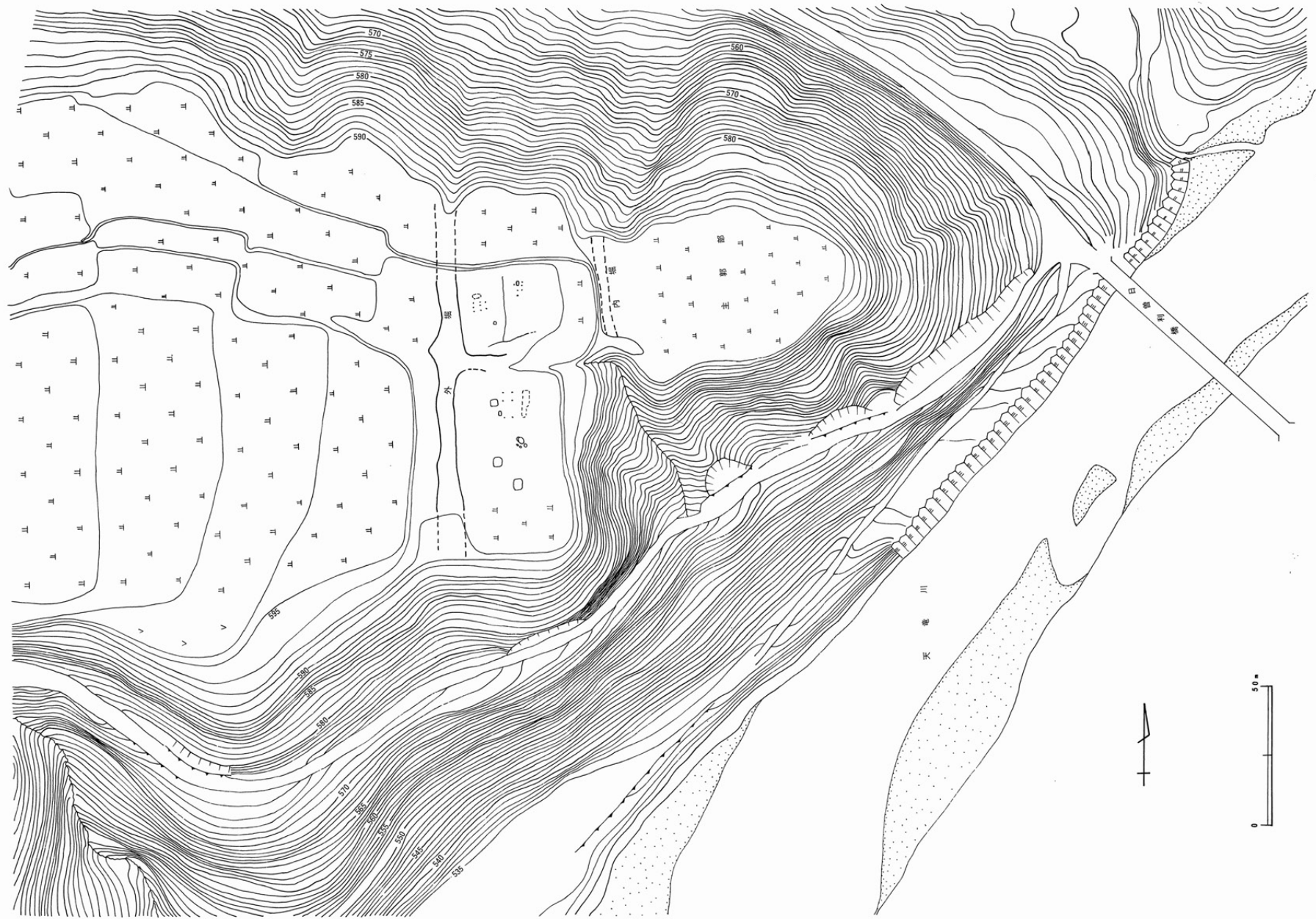
内堀と主郭部



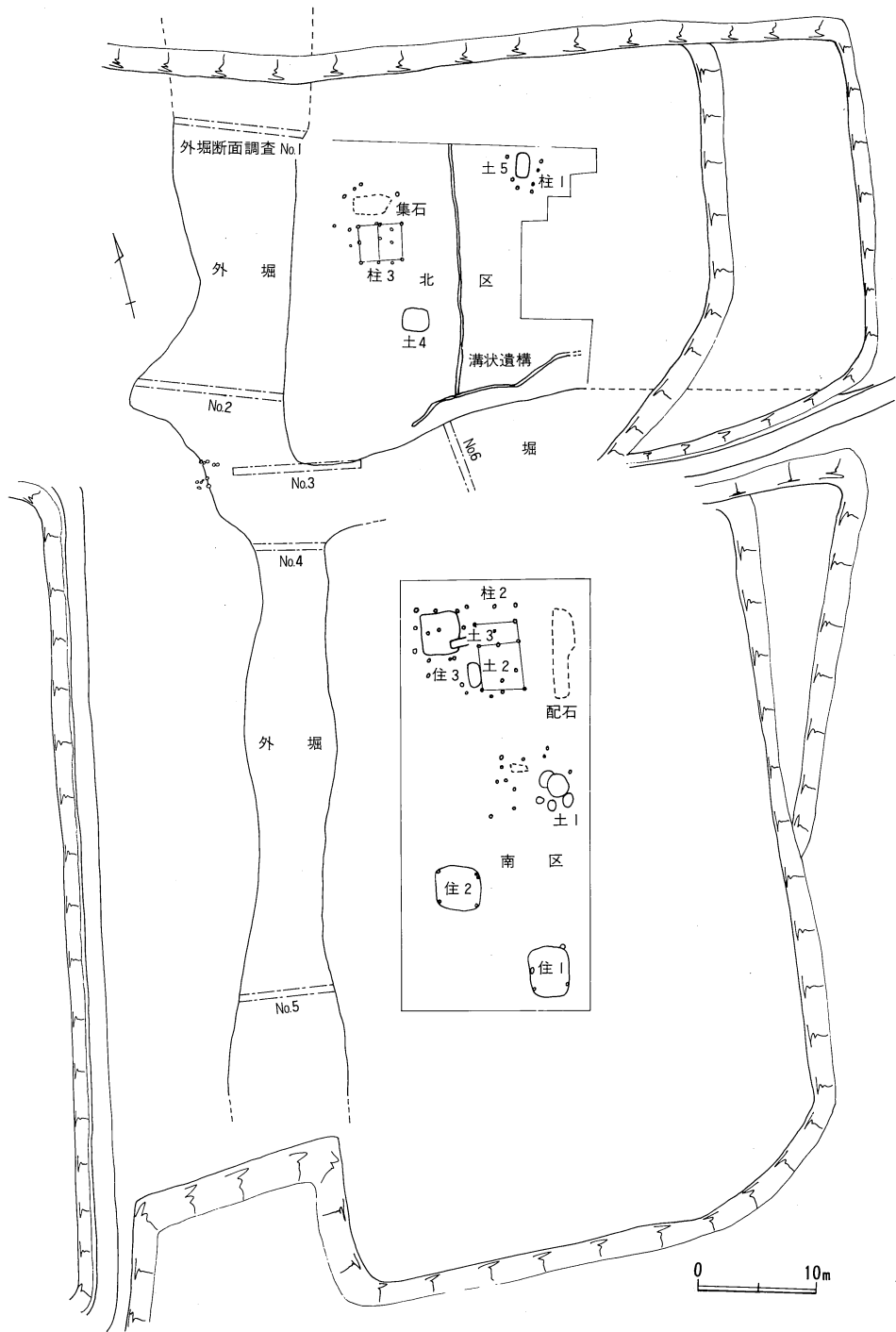
天伯神社(主郭部南斜面)

#### 〔参加者名簿〕

中上保太郎、米山昌富、大沢与一、吉川貞男、堀内増造、佐々木より子、堀内章枝、野原国枝、唐沢かね子、北沢あつみ、佐々木きのえ、佐々木みず江、千村重子、堀内とし子、米山さかえ、宮下喜代子、星野一雄、大沢喜重、佐々木悟、宮沢富雄、桃沢義高、唐沢千明、三石ふさ子、三石千代、塚本いせ、小田切房子



第3図 唐次城付近地形図 (1:1000)



第4図 遺構配置図 (1 : 600)



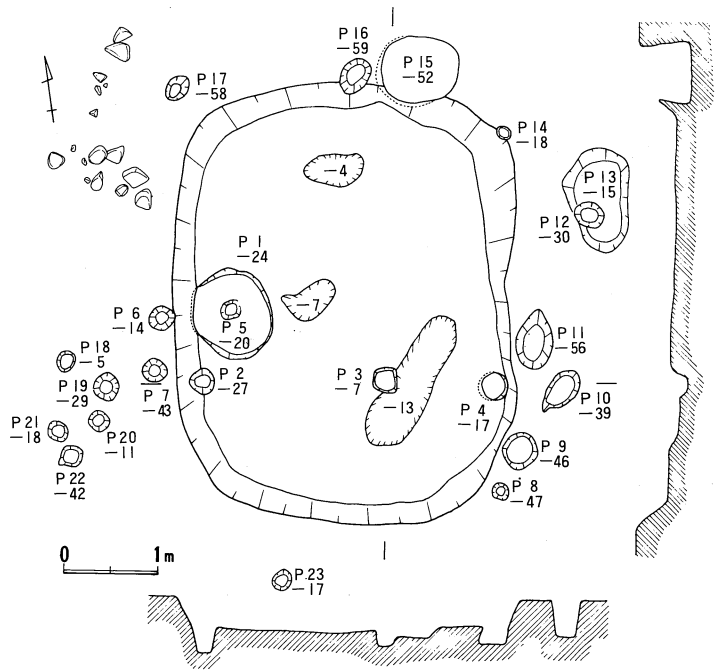
# 第三章 遺 構

## 第1節 住居址

### 第1号住居址

調査地区南端より検出された。4 m 70cm × 3 m 50cmを計る隅丸長方形の住居址である。長軸は、ほぼ南北の方向に一致する。壁面は不明瞭で、凹凸がみられる。壁はローム層を約30cm~40cm掘り込んで造られている。床面は軟弱であり、中央が僅か低くなっている。床面には3箇所大きな凹みがみられ、全体に凹凸がある。カマド等の施設はみられない。ピットは壁内にP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4箇所がみられ、また西壁付近には径1 mの大形のピットがある。壁外にもP<sub>5</sub>~P<sub>23</sub>の18個のピットがあり、この内P<sub>5</sub>、P<sub>6</sub>、P<sub>7</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>9</sub>、P<sub>10</sub>、P<sub>11</sub>、P<sub>12</sub>、P<sub>13</sub>、P<sub>14</sub>、P<sub>15</sub>、P<sub>16</sub>、P<sub>17</sub>などは建物に関係あるピットと思われる。覆土上層から中層にかけて炭化物、焼土がみられた。

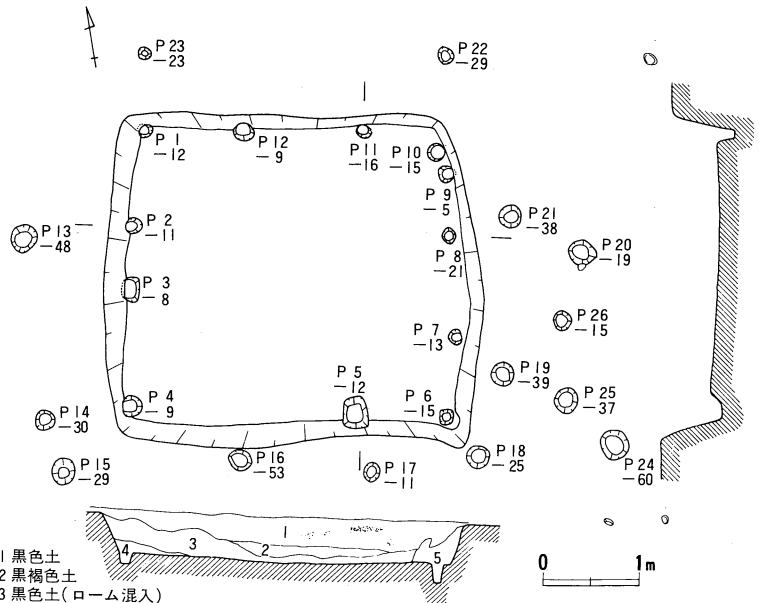
遺物は床面、覆土下層からは少なく、覆土中層、上層が多かった。陶磁器(第20図)、鉄製品、砥石(第22図)等が出土した。陶器は大部分が室町時代のものである。



第5図 第1号住居址(1:80)

### 第2号住居址

調査地区南西より検出された。第1号住居址より北西へ約10 mの所にある。3 m 90cm × 3 m 50 cmの長方形を呈する。長軸は、ほぼ東西の方向に一致する。壁は軟弱であり凹凸がある。壁高は水田造成の時に取り土となっているため不明であるが、現存している部分はローム層を約50 cmほど掘り込んでいる。床面は中央に向かって僅かに低くなっているが比較的平坦である。しかし踏み固めたような跡はみられなかった。床面上にはカマド、ピット等の施設は全くみられなかった。柱穴は壁際より12箇所検出された。住居址のコーナーに各1箇所づつあり、その間には2箇所づつみられる。形状も



第6図 第2号住居址(1:80)

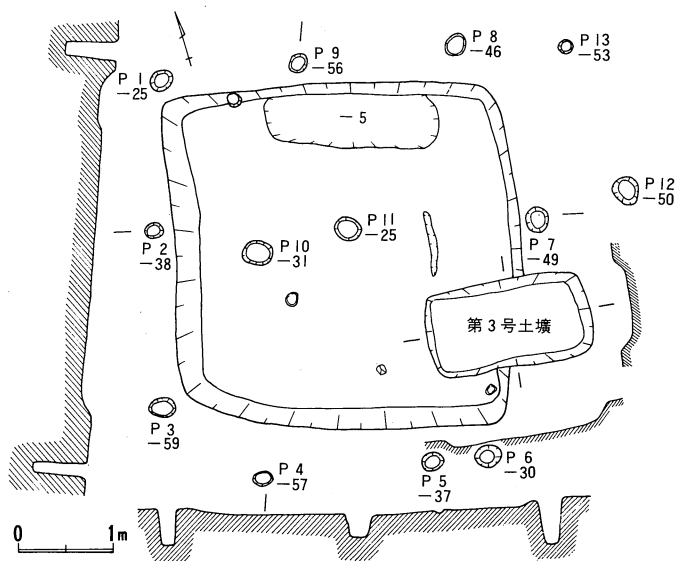
円形の他に方形に近いものもある。また壁外からもピットが検出されており、P<sub>10</sub>~P<sub>13</sub>は住居址に関係した柱穴と思われる。

遺物の出土は床面からは少なく、覆土中層あるいは上層が多かった。陶磁器、内耳土器（第20図）、金属製品、古銭（第22図）、炭化穀類が出土している。陶器は大部分が室町時代の製品である。炭化物、焼土等は覆土中層の黒色土層内に多くみられた。

### 第3号住居址

調査地区の中央やや南より検出された。第2号住居址より北へ約20mの所にある。3m60cmの方形を呈する。軸は南北の方向より僅か東へずれている。水田の造成時に取り土となっているため、壁高は不明である。現存している部分は約10cm前後と浅い。壁はなだらかであり硬く、そのまま床面に続いている。床面は平坦であり、たたきとなっている。北側の壁付近には1m80cm×60cmの長方形の浅い窪みがみられ、この底部もたたきとなっている。柱穴は壁外にみられP<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>、P<sub>4</sub>~P<sub>6</sub>が考えられる。住居址東壁には1m70cm×90cm、深さ約15cmの長方形の土塋がみられる。恐らく後に住居址を壊って作られた土塋と思われる。

遺物は第1・2号住居址に比べると少なかった。陶器（第20図）は大部分が室町時代の製品である。



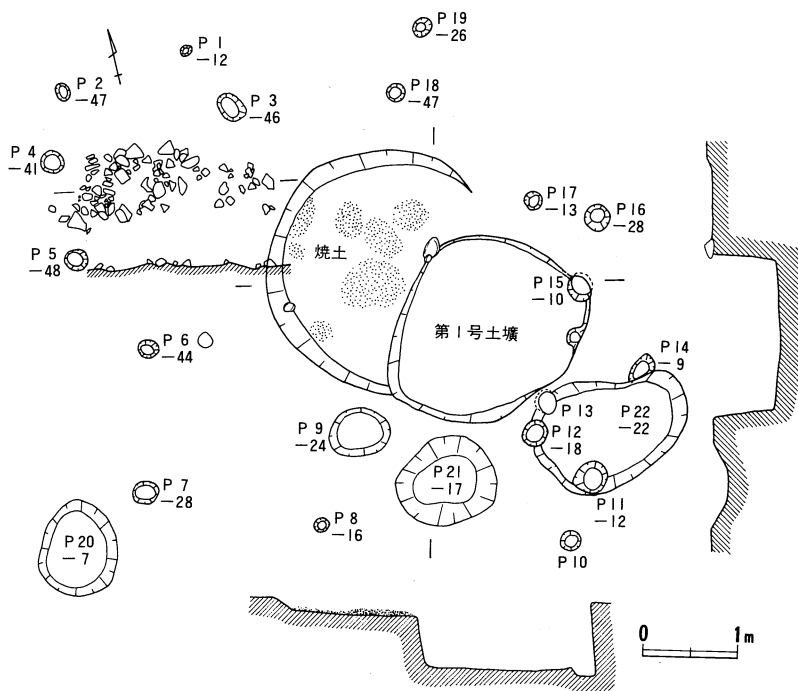
第7図 第3号住居址(1:80)

## 第2節 土塋

### 第1号土塋

第1号住居址と第3号住居址の間に検出された。第1号土塋を中心に小形の土塋、ピット、集石等がみられるが一括して説明したい。

第1号土塋は径2m前後の不規則な円状の土塋である。壁は、ほぼ垂直に近く、ローム層を70cm前後掘り込んで造られている。底部は比較的平坦であり軟弱である。第1号土塋の西側には径2m50cmの半円状の浅い窪みがみられ、東半分を第1号土塋に切り取られた状態となっている。窪み内は焼土と炭化物が一面に広がってみられ、更にその下には灰が層となってみられた。第1号土塋の南側には小形の土塋が2



第8図 第1号土塋とその付近(1:80)

箇所みられる。どちらも深さ20cm前後と浅い。第1号土壌の西には集石がみられる。集石は黒褐色土層上面に同レベルでみられ、大部分が割石であり熱を受けていた。集石の周辺には炭化した穀物がみられ、相当量の炭化物、焼土、灰などもみられた。

遺物は第1号土壌覆土内、土壌付近より陶器（第20図）が出土した。室町・安土桃山時代の製品である。

### 第2号土壌

第3号住居址の南約3mの所に検出された。2m10cm×1mの長方形を呈する土壌である。長軸はほぼ南北の方位に一致する。土壌はローム層を約20cm～30cm掘り込んで造られている。壁はほぼ垂直に近く軟弱である。土壌の底部は中央付近が低くなっており、全体に東への傾斜がみられる。底部の状態は凹凸がみられ、やや硬い程度である。土壌覆土内には20数個の石がみられる。石は土壌の北半分に集中しており、大形の石には自然石が多く小形の石には割石が多い。大部分の石は覆土下層にあり、3個の大形の石は底部あるいは底部直上にみられた。焼石はみられなかった。土壌内は黒色土とローム層の混合土で充満していた。また土壌南東の隅には深さ5cm前後の浅い窪みもみられた。

遺物の出土は少なかった。覆土より陶器、炭化米が検出された。



第9図 第2号土壌(1:40)

### 第3号土壌

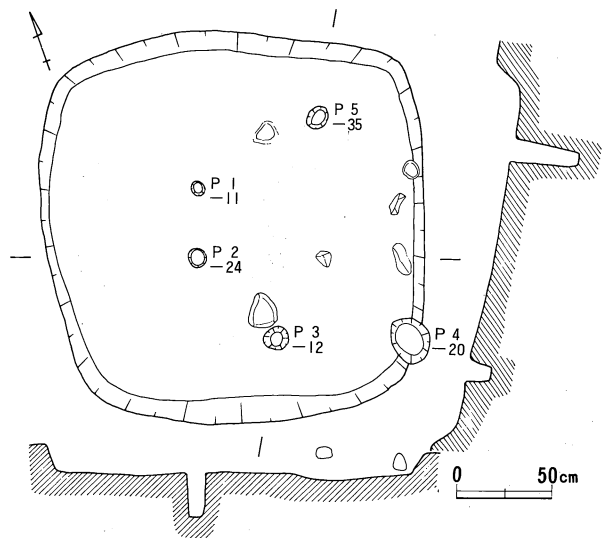
第3号住居址を壊り造られている。1m70cm×1mの隅丸長方形を呈する土壌である。ローム層を約15cm～20cm掘り込んで造られている。壁は比較的なだらかである。底面は平坦で硬い。第3号住居址の壁、床面を壊しているところから、時期的には第3号土壌の方が新しいと考えられるが、第3号住居址に関連する施設ということも考えられる。

遺物は覆土内より内耳土器が出土している。

### 第4号土壌

調査地区の中央やや北よりに検出された。2m前後の隅丸方形を呈する土壌である。土壌付近は取り土となっているため壁高は不明であるが、現存する部分はローム層を約15cmほど掘り込んで造られている。壁はやや傾斜がみられる。底面は比較的平坦であるが自然の硬さである。底面には5個のピットがみられ、いずれも小形であり深さも35cm以下と浅い。ピット間には規則性はみられない。石は覆土中より5個検出された。いずれも熱を受けていない。

遺物はP<sub>1</sub>内より内耳土器の小破片、覆土から陶器の小破片数点が出土したのみである。覆土下層に僅か炭化物がみられた。

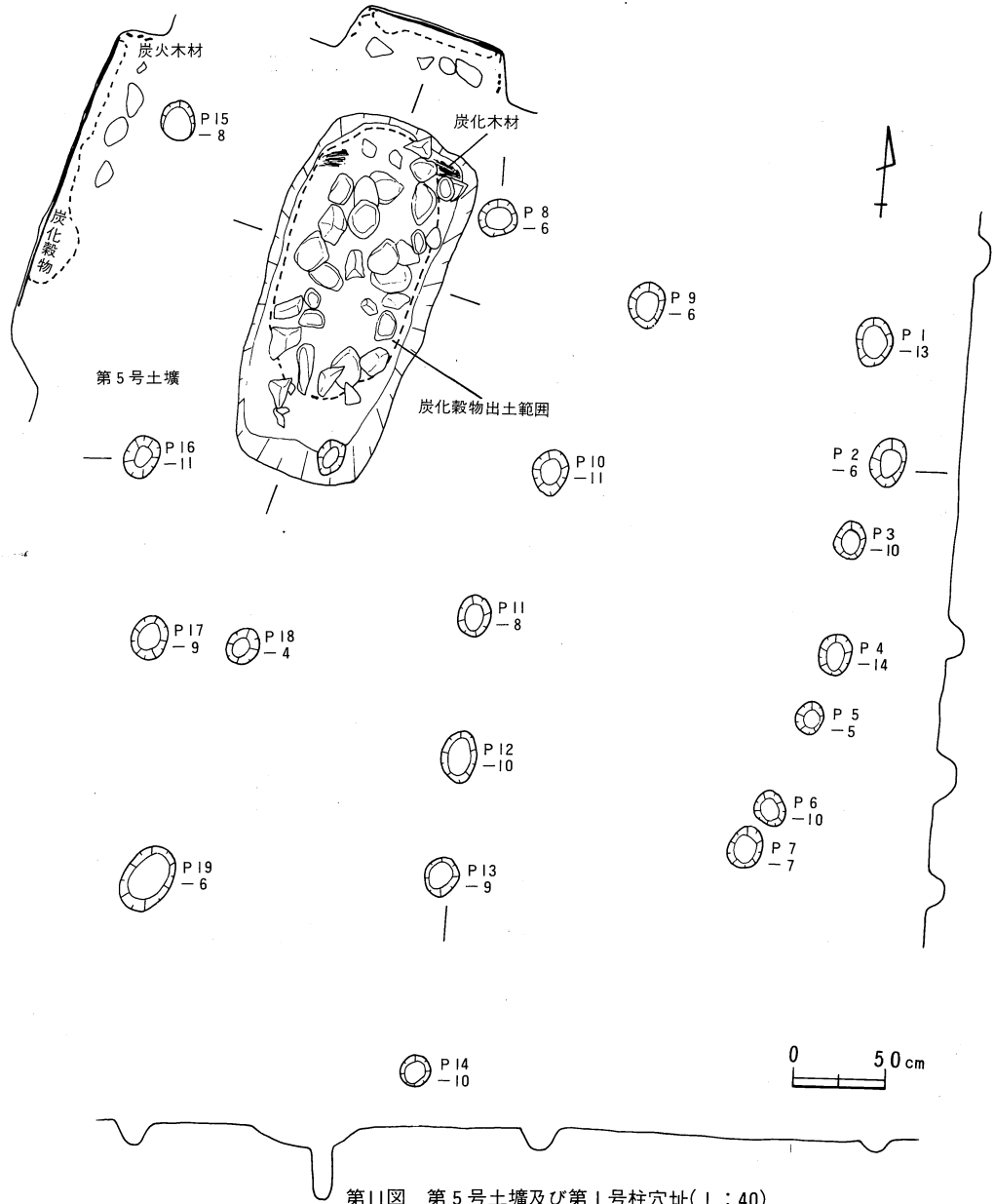


第10図 第4号土壌(1:40)

### 第5号土壌

調査地区の北東より検出された。2m×90cmの長方形を呈する。長軸は南北の方位より東へずれている。付近は取り土となっているため正確な壁高は不明である。現存している部分はローム層を約30cmほど掘り込んで造られている。壁はほぼ垂直であり、自然の硬さである。底面は平坦で自然の硬さであり、底面直上には薄い板状の炭化物が焼土とともに一面にみられた。また北東、北西の隅には、箱の棧と思われる炭化物もみられた。恐らく土壌内に木製の箱が入っていたものと思われる。薄い板状の炭化物の上から覆土中層にかけては、全面にわたり相当量の炭化した米・大豆・粟等が検出された。米・大豆・粟等は混っていたが、比較的土壌の南側は大豆・粟が多く、北側は米が多かった。覆土内は炭化した穀物、焼土等の他に黒褐色土が充満していた。また覆土上面に





第11図 第5号土坑及び第1号柱穴址(1:40)

は石がみられた。石は35個ほどあり15cm~20cmの大きさのものが多く、自然石と割石の2種類からなっている。自然石は比較的上面にみられ、割石は下面に多いように思われた。大部分の石は焼石であり、石の底面に熱を受けた跡がみられた。

遺物は炭化穀物(第19図)の他に陶器(第21図)、古銭(第22図)が出土した。陶器は安土桃山時代の製品である。

### 第3節 柱穴址

#### 第1号柱穴址

調査地区の北東より検出された。第5号土坑から南東に19個のピットが認められた。ピットは15~35cmの円形、楕円形からなり茶褐色土を4~14cm掘り込んで造られていた。茶褐色土上面からは炭化物の小片が検出されたが

硬い部分はみられなかった。ピットは大きくP<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>~P<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>~P<sub>6</sub>の3列に分けられるが、ピット間にはっきりした規則性は認められなかった。第5号土壌との関係は明らかでない。

遺物は茶褐色土面より陶磁器(第10図)が出土した。室町~安土桃山時代の物である。

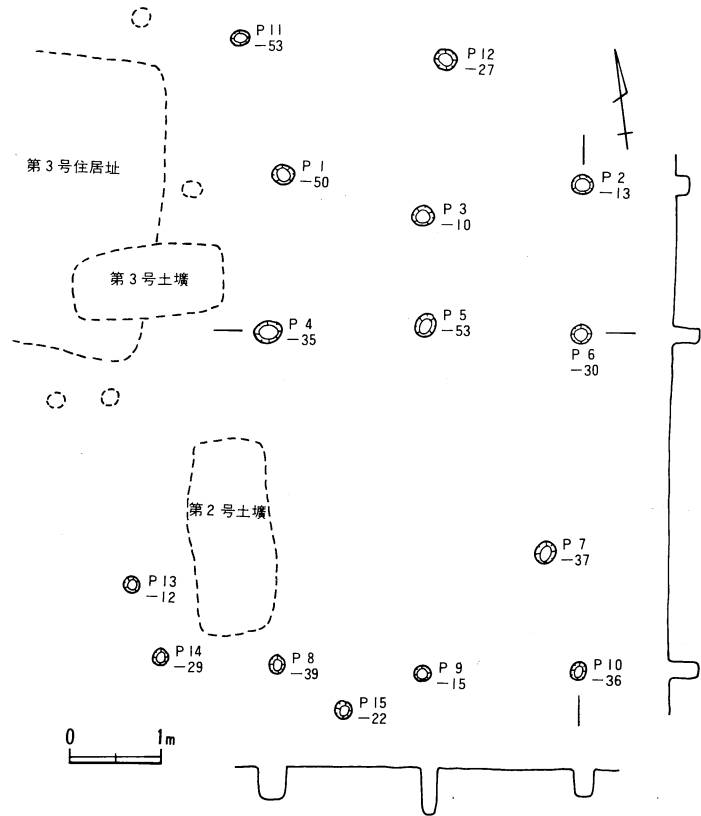
### 第2号柱穴址

調査地区中央やや南より検出された。第3号住居址、第2号土壌に隣接する。5m×8mの範囲に15個のピットが認められた。ピットは20~30cmの円形からなり黒褐色土を12~53cmほど掘り込んでいる。黒褐色土面は炭化物、焼土が多くみられ、特別硬い部分はみられなかった。P<sub>1</sub>~P<sub>6</sub>は建物遺構に關係する柱穴と思われる。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>、P<sub>3</sub>とP<sub>4</sub>、P<sub>5</sub>とP<sub>6</sub>の間は約3m50cmでありP<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>、P<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>の間は約5m50cmある。恐らく3間×2間の建造物と思われる。

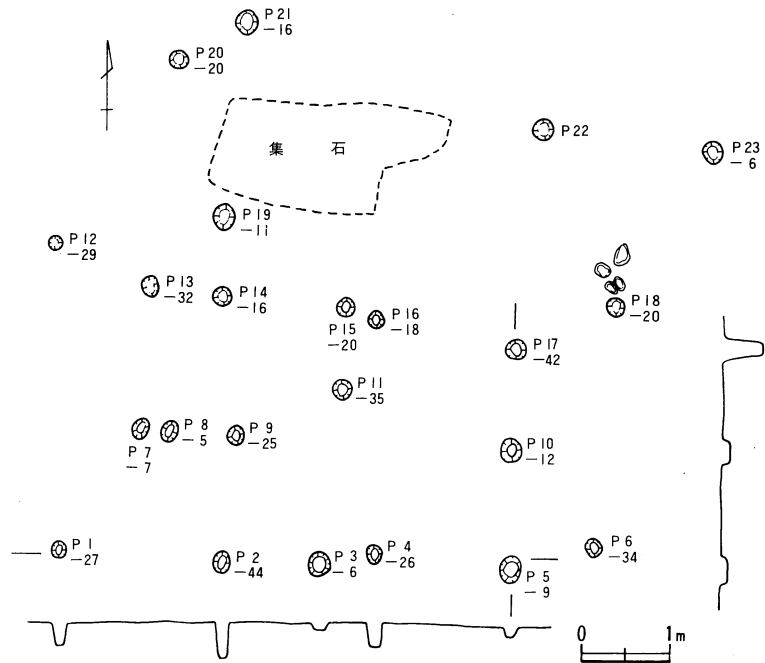
遺物の出土は比較的豊富であった。陶磁器(第21図)が主であり、それらは室町、安土桃山時代の製品である。

### 第3号柱穴址

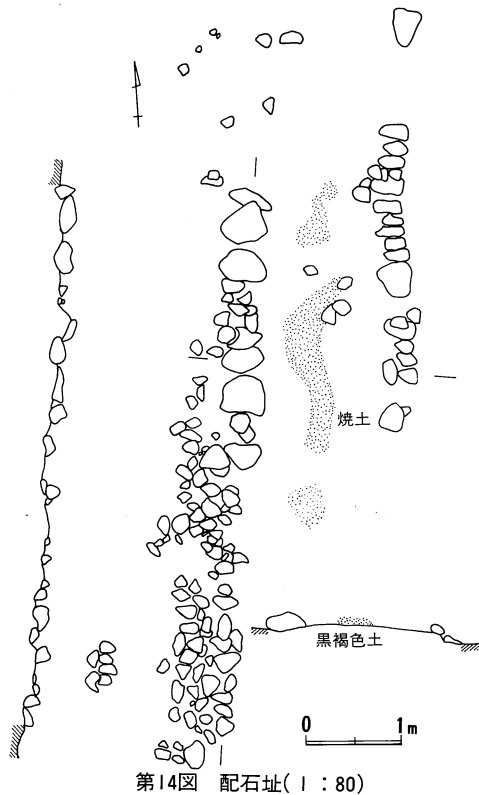
調査地区の北西より検出された。東西8m、南北7mの範囲に23個のピットが点在していた。ピットは大部分20cm前後の円形であり、ローム層を掘り込んで造られていた。深さは5~44cmとまちまちである。水田造成により取り土となっているため、全体にこれより深かったものと考えられる。ピットは南半分が多く、いくつかのピット間



第12図 第2号柱穴址(1:80)



第13図 第3号柱穴址(1:80)



第14図 配石址(1:80)

には規則性も認められた。P<sub>2</sub>とP<sub>4</sub>、P<sub>6</sub>とP<sub>8</sub>は、約3mであり、P<sub>2</sub>~P<sub>6</sub>、P<sub>4</sub>~P<sub>8</sub>の間には関連がみられる。

遺物は陶器(第 図)が出土している。室町~安土桃山時代の製品である。

#### 第4節 その他

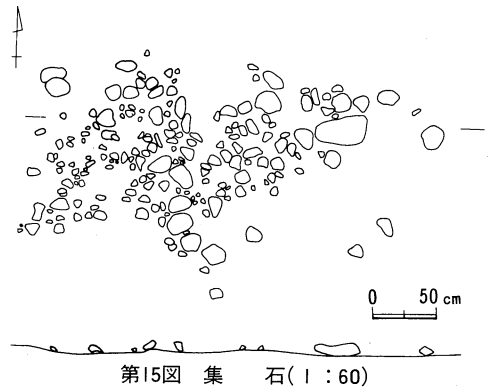
##### 配石址

第2号柱穴址に隣接して検出された。8×3mの範囲に約150個の自然石からなっている。石は約80cmの中で南北に走っており、発掘地域を拡張すれば更に南へ続くものと思われる。またこの配列から約2m東には3mにわたり石を南北に並べられた別の配列がみられた。この2つの配列の間には多量の焼土がみられたが、焼土の多い割には焼石は少なかった。配石、焼土とも黒褐色土面にみられた。配石は5~40cmの大きささまざまな石より構成されており、配石の上面の高さは一定ではないが全体的にみると比較的平坦であった。

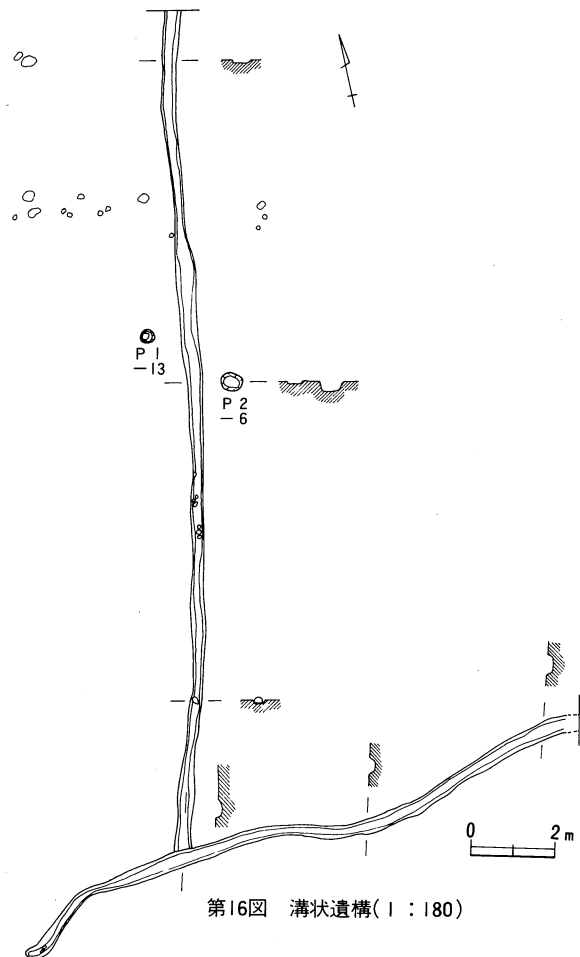
配石址からの遺物の出土はなかった。

##### 集石

調査地区の北西より検出された。第3号柱穴址に隣接しており、第3号柱穴址との関係は明らかでない。水田造成により取り土となっており、相当壊されているものと思われる。現存する部分は、ローム層上に3m×1.5mの範囲に数cmの小石から40cm前後の自然石より構成されている。焼土はみられなかった。遺物の出土はない。



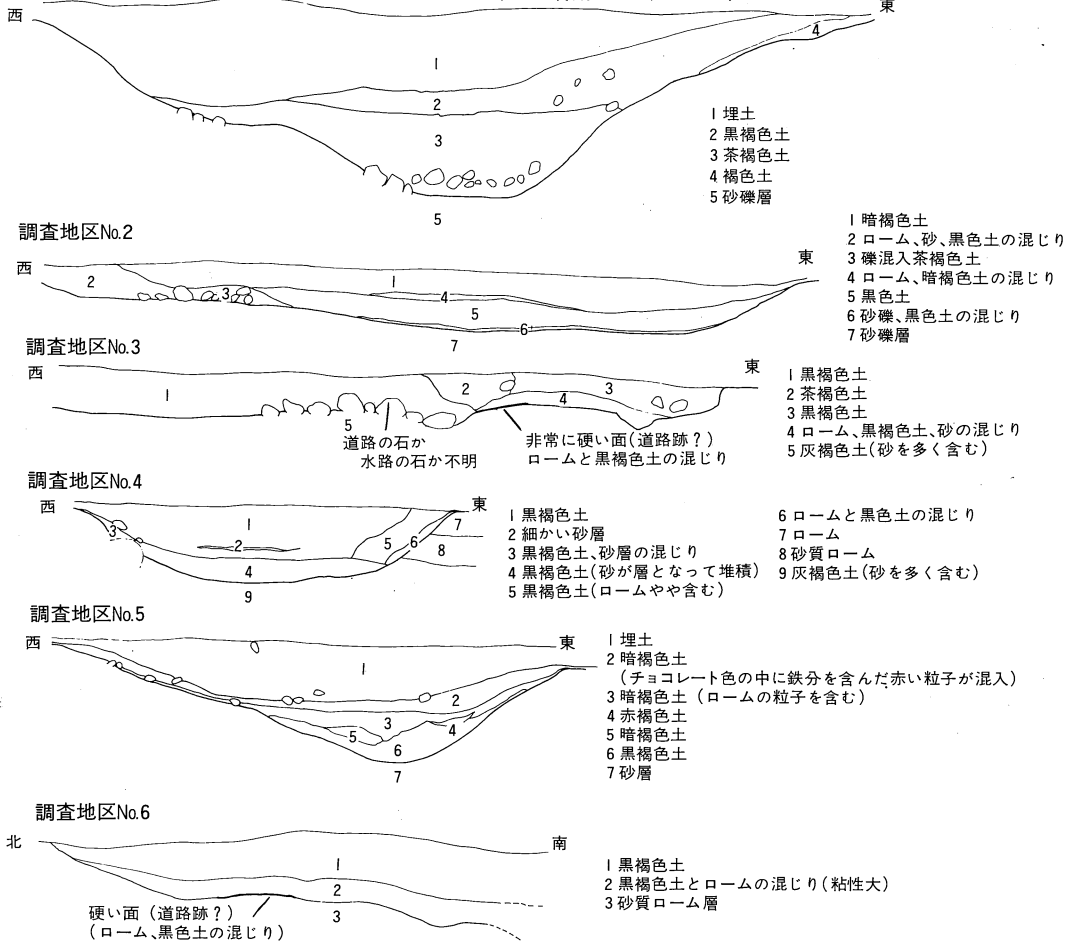
第15図 集石(1:60)



第16図 溝状遺構(1:180)

調査地区No.1

第17図 外堀土層断面図 (1:120)



## 溝状遺構

北地区に東西、南北の2筋の溝状遺構が検出された。南北の溝は、東西の溝に切られた形となっており、2筋の溝が同一のものか否か明らかでない。接合部の底面はローム上面より東西の溝は-14cm、南北の溝は-4cmであり、10cmの差がみられた。東西の溝は、外堀から内堀へ続く堀より北へ約1mの所から始まっている。東西の溝の深さは15cm前後であり、断面は深いU字状となっている。底部は凹凸が激しく、部分的に硬い面がみられた。砂粒はほとんどみられなかった。南北の溝は東西の溝に比べてやや浅かった。断面はU字状を呈しており、底面は東西の溝と同様凹凸が激しく、部分的に硬い面がみられた。溝内には、ところどころ小形の石がみられたが、底面上の石は少なく、溝内に浮いた形の石が多かった。

遺物は東西の溝の覆土より陶器片が一片出土した。

## 外堀

外堀付近の開田は古く、外堀を埋めた当時の様子を知っている者は現在いない。しかし南側・北側の段丘崖には一部分堀の跡が残っており、それから外堀のおおよその位置が推察できた。調査により外堀の上面の輪郭が確認された。それによると堀の中央部付近が西へのびており、そこから北側へは8~13mの巾で延び、南側は北側に比べ僅か引込んだ形で5~10mの巾で真直ぐ延びている。また部分的な調査しかできなかったため明らかでないが、内堀南端に続くもう一つの堀が存在すると思われる。

断面No.1は調査地区の北端であり、上面巾は約13m、深さ約3mである。中央より内側の傾斜面は外側の傾斜面に比べると急であり、外側の傾斜面は2段となっている。底部近くは大形の礫が多く、底部は砂礫層である。No.2は中央部付近の断面である。西側の小河川からの砂の堆積がみられる。上面巾は12m前後であり、深さは約1mである。No.3は外堀と内堀へ延びる堀の接点付近の断面である。断面調査地区内で一番堀の浅い部分である。断面中央付近に石の集中してみられる部分があるが、如何なる性格のものか明らかでない。断面中央部分

に非常に硬い面がみられた。No.4は中央南の断面である。上面巾約6m、深さ約1.3mである。外側の傾斜面に比べ、内側の傾斜面は僅かに急である。No.5は調査地区南端の断面である。上面巾は約8mであり、深さは約2m弱である。内側の傾斜面は比較的急であるが、外側は傾斜面中央付近で僅かに折れ、なだらかな傾斜となっている。No.6は内堀に続く堀の断面である。調査が不十分で断面の形状は明らかでないが、堀の北側の斜面は深さ1m前後で比較的なだらかであり、途中より急に深くなっている。傾斜面の途中には、巾1.4mの硬い面がある。

以上、個々の断面について述べてみたが、外堀とそれから東へ延びる堀の成因には西から流れ込む小河川が重要な役割を持っていたと考えられる。恐らく、この河川を利用して内堀南端へ続く堀が造られ、また南北へ続く外堀も造られたと思われる。城郭の外部から外堀を通してどの様に入ったかについては明らかでない。が、断面No.3でみられる様に、外堀の中央付近の南側が最も堀が浅く、非常に硬い面がみられる事などからここに土橋が存在したものと考えられる。また東に延びる堀のなだらかな傾斜面にも硬い面が検出されており、城郭の外部より堀底道を通り主郭部へ通じていたことも考えられる。(伊藤 修)

## 第IV章 遺物

### 第1節 唐沢城以前の遺物

今回の調査で、城以前の時代の遺物が数点出土した。土器は3片出土しており、いずれも縄文時代のものである。石器は黒曜石製の石鏃1点、硬砂岩製の打製石斧2点、黒曜石7片が出土した。その他、須恵器の小破片が2片出土した。

### 第2節 陶磁器、内耳土器

今回の調査で出土した陶磁器、内耳土器は、約350点で、そのすべてが断欠品である。陶磁器の種別をみると瀬戸系約55%、常滑系約10%、美濃系約5%、青磁・白磁約13%、内耳土器約15%、その他約2%であり、瀬戸系が全体の半分以上をしめている。時代的にみると須恵器が2点あり、後は室町時代約66%、安土桃山時代約23%、江戸時代約5%、不明その他約6%である。器形からみると、日常食器類が大部分であり、一部祭器と思われるものがある。

地区別にみると出土量は北区が全体の28%、南区が72%であり、圧倒的に南区が多い。北区は室町時代のものが40%、安土桃山時代のものが43%、江戸時代その他が17%である。南区は室町時代のものが86%、安土桃山時代のものが13%、江戸時代その他が1%である。北区に比べ南区は、室町時代の色彩が強いように思われる。

出土陶磁器の詳細については第1表の通りである。

### 第3節 古銭、金属製品、砥石

#### 1、古 銭

欠損品も含めて22点出土した。第22図1は咸平元宝(北宋998年)、2は熙寧元宝(北宋1068年)、3・9は至道元宝(北宋995年)、4は開元通宝(唐621年)、5・8は皇宋通宝(北宋1039年)である。

#### 2、金属製品

第1号住居址、第2号住居址、第1号土壌より鉄製釘類、鉄製鎌、装飾品などが出土した。鉄製釘は第1号・第2号住居址より出土しており、断面が方形を呈している。20は第2号住居址覆土より出土した鉄製鎌である。刃部が半分ほど欠損しており、一面茅状の植物の附着した痕跡がみられる。21は第2号住居址の覆土より出土したもので、青銅製の装飾品と思われる。22は第2号住居址床面より出土した環状の鉄製品である。断面は円形であるが太さは均一でない。23は第1号土壌付近より出土した鉄製品である。断面は方形を呈しており、先端部は鋭い。

#### 3、砥 石

第1号住居址、第2号住居址、第2号土壌他より出土した。全部で6点出土しており、いずれも欠損品である。比較的よく使用されている。(伊藤 修)



## 第4節 自然遺物（出土穀類）

出土した農作物穀粒遺体は、米、小麦、大豆、粟、ソバの種実であった。量的に多いのは米、大豆、粟であり、小麦、ソバが少量確認された。第2・3号住居址、第1号土壌付近からは粃米が塊状にかたまった状態で、第5号土壌からは粟と大豆が2：8くらいの割合で含まれている塊状のものと、米・大豆・粟・ソバ・小麦が覆土と混じった状態のものが出土した。このうちの一部を水洗し、米粒については長さ、幅及び厚さをノギスで計測した。また粟・小麦・大豆・ソバは万能拡大投影装置を用いて長さと同幅を計測した。

### 1. 米 粒

塊状で出土したものはその解体が難しく、しかし米がかなり変形していると思われたので、主に第5号土壌から出土したものの原形をとどめていると思われる100粒を選んで計測した。その結果、粒長は3.8～5.5mm、粒幅は1.6～3.7mm、粒厚は1.7～2.5mmとかなり幅広い形態変異が認められた。長さと同幅及び厚さの平均値は $4.6 \times 2.7 \times 2.0$ mmであったが、粒長4.4mm、粒幅2.8mmのものが最も多かった。直良氏の記録のなかのいわゆる下須川種<sup>(1)</sup>と名づけられている、米粒の長さに対して幅がやや広く全貌が広楕円形を呈しているものとはほぼ近いものが約20%ほど含まれていた。しかし50%以上は、北東アジア種（日本型）といわれる標準型のものであろう。その中に粒長5.3mm以上の大型のものと、幅2.1mm以下の細身で小粒のものが若干混じっていた。いずれにしても、かなり変異に富んでいることがわかったが、これが単なる一品種の個体変異によるものであるか、あるいは下須川種に由来するような品種が北東アジア種に混じって作られていたのかは明らかではない。参考までに天正10(1582)年に落城炎上した下伊那郡松川町台城の焼失倉庫址から出土した炭化米<sup>(2)</sup>、及び弥生文化期の各地方出土の古代米との粒長幅比の比較を試みた（第18図）。これによると本遺跡出土の炭化米は、九州地方のものに類似しており、また台城のものは関東地方のものときわめて近い形態を示す傾向がみられた。

### 2. 大 豆

多量に出土したもののうち完全に近い30粒を計測した。現在の栽培品種と同様、広楕円形のダイズ特有の形態を保有し、臍帯痕も細かく少し短いが明瞭に残止されているものも多い。長さ×幅× $\frac{\text{長}}{\text{幅}}$ の平均値は8.7mm×6.8mm×1.28であり現在のものとはほぼ同等であるが、変異の幅は長さ7.0～10.7mm、幅5.0～8.7mm、 $\frac{\text{長}}{\text{幅}}$ 1.00～1.60と個体変異は著しい（第19図）。

### 3. 粟

大豆と併にきわめて多量に出土し30粒を計測した結果、稃を有しているものもあるが、大部分は火焼のために稃を失ったものと思われる。粒は現在のものと比較し、円形に近く小粒であった。長さ×幅× $\frac{\text{長}}{\text{幅}}$ の平均値は、1.55mm×1.34mm×1.16mmであった。（第19図）

### 4. 小 麦

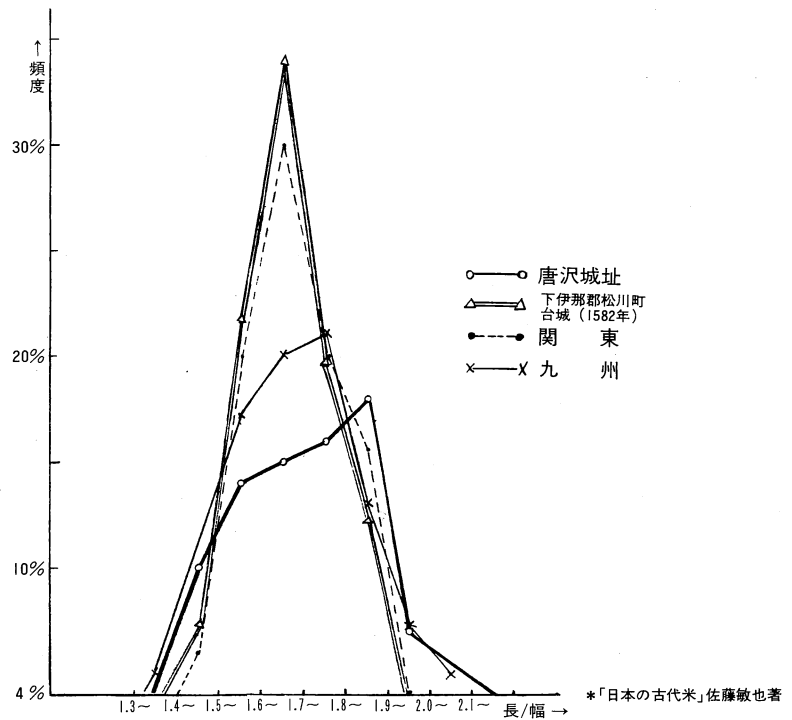
小麦の出土量は極くわずかであったが、確認した20粒について計測した結果、長さ×幅× $\frac{\text{長}}{\text{幅}}$ の平均値は3.7mm×2.8mm×1.3であり、きわめて小粒であった。この小麦は長さに対して幅が著しく広く概貌が類円形もしくは広楕円形であることからコンパクタム小麦（6倍性、Triticum compactum）と推察される。形状は粒の腹面はあまりふくらんでいないが、裏面は内外両縁丸みをおびている。腹面には縦に正中位に溝が切れ込んでいる。

### 5. ソ バ

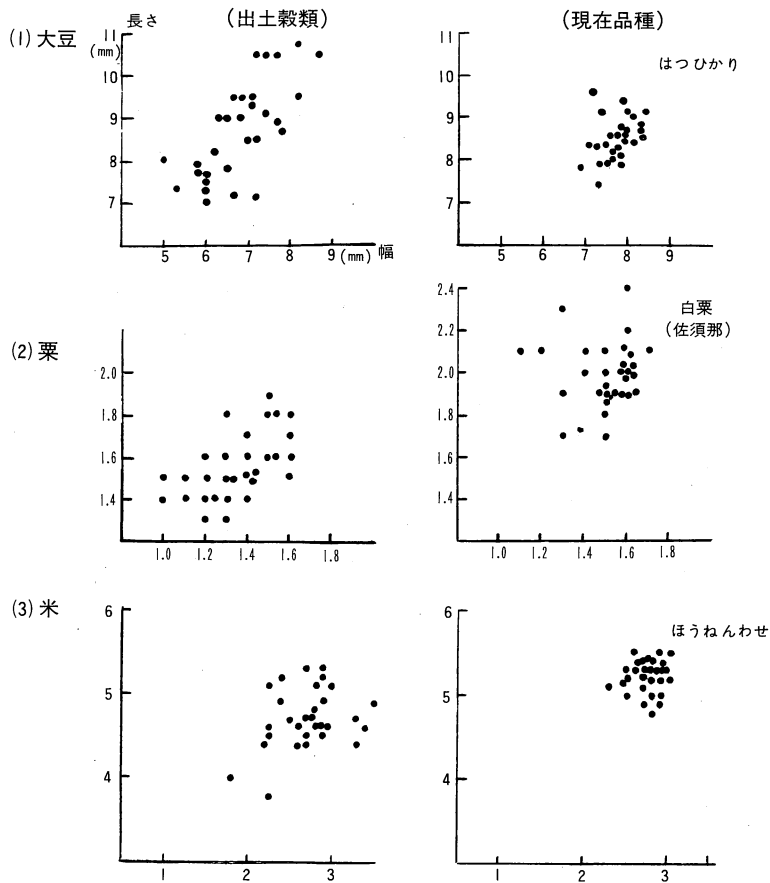
この遺跡中で確認されたのは僅か2粒であったが、いずれも現在の普通ソバ種実<sup>(1)</sup>に比しかなり小粒であった。  
(小林喜美江)

(註)

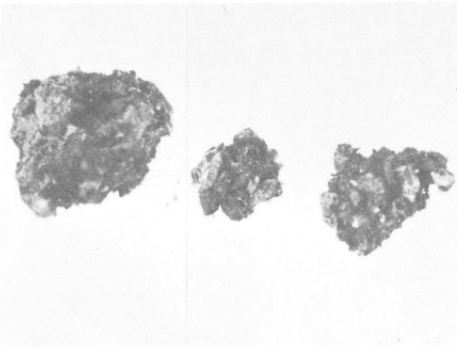
1. 直良信夫 「日本古代農業発達史」 さえら書房
2. 佐藤敏也 「日本の古代米」 雄山閣



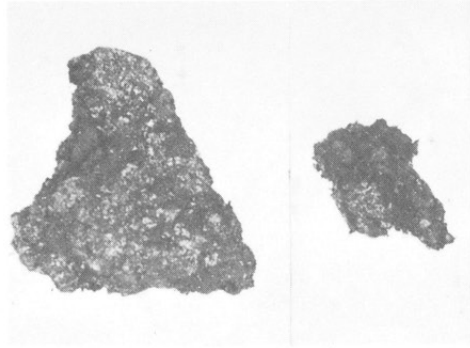
第18図 弥生時代各地古代米\*と唐沢城址及び台城遺跡出土米との形態比較



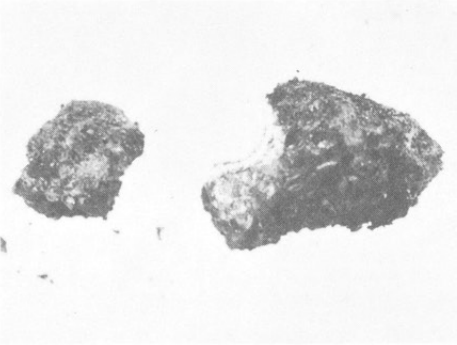
第19図 出土穀類の形態変異と現在品種との比較(mm)



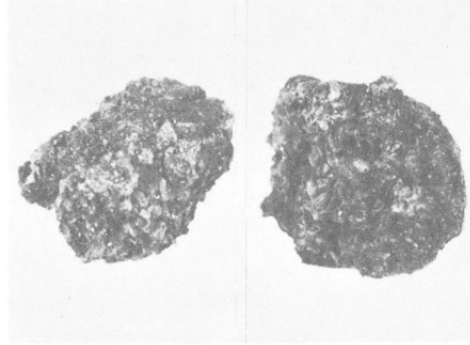
第2号住居址(×1.0)



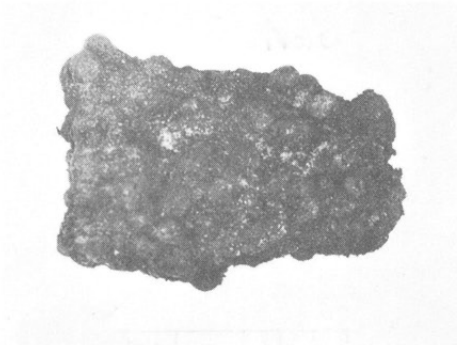
第3号住居址(×1.0)



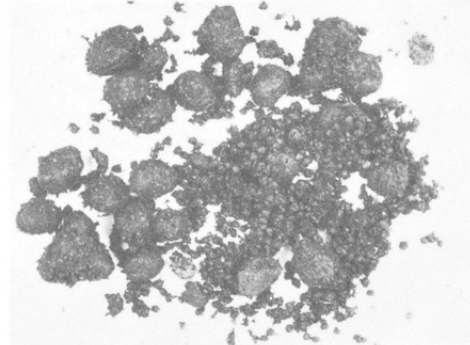
第3号住居址(×1.0)



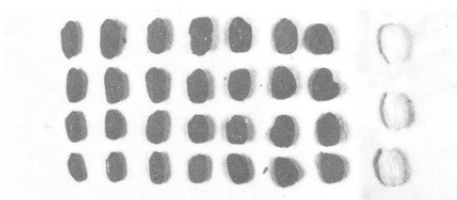
第1号土壙付近(×1.0)



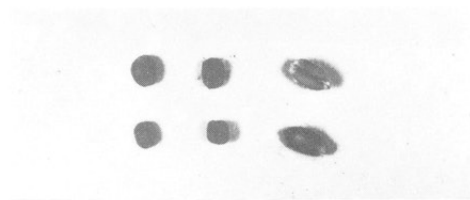
第5号土壙(×0.5)



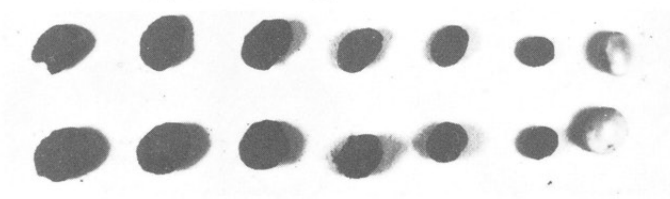
第5号土壙(×1.0)



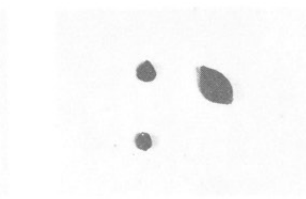
ほうねんわせとの比較



普通小麦との比較



はつひかりとの比較



普通そばとの比較

第1表 出土陶器一覽表

番号	名称器形	部分	厚さmm	出土場所	製作時代	注記番号	備考
1	瀬戸水差し	底	6	第1号住床面	室 町	1	第20図7、図版15の1
2	常滑	胴	15	第1号住覆土	" "	2	
3	瀬戸大鉢(盤)	"	6	"	" "	3	第20図11、図版15の2
4	常滑	胴	11	"	" "	4	
5	中国白磁	底	7	"	" "	5	第20図8、図版15の3
6	瀬戸祖懐	胴	6	"	室 町	7	
7	瀬戸天目	口縁、頸部	6	"	" "	8	第20図9、図版15の4
8	美濃	胴	11	"	" "	9	
9	常滑	胴	11	"	" "	10	
10	常滑	胴	11	"	室 町	11	
11	美濃	胴	12	"	" "	12	
12	美濃	胴	8	"	" "	13	
13	瀬戸灰釉	皿	7	"	" "	14	第20図10
14	中国青磁鉢	口 胴 縁	5~8	"	末	15	
15	灰釉	口 縁	7	"	" "	16	
16	瀬戸鉄釉	皿	6	"	室 町	19	
17	瀬戸灰釉	皿	5	"	" "	20	
18	瀬戸白釉	皿	6	"	" "	21	
19	瀬戸灰釉	皿	5	"	" "	22	
20	瀬戸天目	口 縁、胴	8	第2号住床面	" "	24	第20図13、図版15の5
21	瀬戸祖母懐	胴	6	"	" "	25	
22	瀬戸灰釉三脚大鉢	胴	9	第2号住覆土	" "	30、33	第20図14、図版15の7
23	瀬戸大鉢	"	7	"	" "	31	第20図12
24	瀬戸祖母懐	胴	8	"	" "	34	
25	常滑	胴	10	"	" "	35	
26	瀬戸	胴	9	"	" "	36	
27	瀬戸平茶碗	胴	6	"	" "	37	
28	瀬戸祖母懐	口縁、頸、胴	8	"	" "	38	第20図15、図版15の8
29	瀬戸灰釉	胴	8	"	" "	42	図版16の2
30	中国青磁	胴	4~9	"	" "	44	第20図16、図版16の3
31	中国青磁	胴	6	"	" "	51	
32	中国青磁	口 縁	4	"	" "	52	
33	瀬戸鉄釉	胴	4	"	室 町 町 ?	53	
34	瀬戸鉄釉	底	8~14	第3号住覆土	室 町 末 町 ?	55	第20図17、図版16の4
35	瀬戸天目	口 縁、胴	6	"	室	56	
36	瀬戸祖母懐	胴	5	"	" "	57	
37	瀬戸灰釉	口 縁、胴	6	"	" "	61	
38	瀬戸平茶碗	口 縁	5	"	" "	62	
39	瀬戸大鉢	底	8	"	" "	63	
40	瀬戸灰釉	底	6	第1号土壇覆土	鎌倉~室町初	64	図版16の5
41	瀬戸祖母懐	胴	9	"	室 町	65	
42	瀬戸灰釉平茶碗	口 縁、胴	6	第1号土壇付近	" "	66	
43	三脚小鉢	口 半 形	4	"	安土 桃山	68	第20図21、図版16の7
44	瀬戸灰釉大鉢	口 縁、胴	7	"	安室 町	69	第20図20
45	常滑	胴	10	"	" "	70	
46	瀬戸祖母懐	底	10~17	"	室 町	71	第20図25
47	美濃?平茶碗	底	8	"	" "	72	第20図18、図版16の6
48	瀬戸天目	口 縁、胴	5	"	室 町	73	
49	瀬戸天目	"	6	"	" "	74	第20図24
50	瀬戸すり鉢	胴	10	"	安土 桃山	75	
51	瀬戸灰釉大鉢	口 縁	6	"	安室 町	76	第20図23
52	不須	底	7	"	" "	77	第20図26、図版17の1
53	須筒形鉄釉	口 縁	8	"	" "	78	第20図27、図版17の2
54	四耳茶壺	口 縁	7	"	安室 町	79	
55	瀬戸平茶碗	胴	6~8	"	" "	80	第20図22
56	瀬戸平茶碗	口 縁	5	"	" "	81	
57	瀬戸平茶碗	口 縁	5	"	" "	82	
58	瀬戸灰釉	皿	5	"	室 町	83	
59	瀬戸天目	口 縁	5	"	" "	84	
60	瀬戸鉄釉小鉢	皿	5	"	" "	86	第20図19、図版17の4
61	美濃	胴	9	第2号土壇覆土	" "	58	
62	瀬戸土壺	蓋	5	"	江 戸	59	
63	瀬戸平茶碗	口 縁、胴	6	第5号土壇覆土	安土 桃山	89	第21図1、図版17の5
64	瀬戸すり鉢	胴	8	"	" "	90	図版17の6
65	常滑	胴	10	第1号柱穴	" "	158	
66	美濃	胴	8	"	" "	159	
67	瀬戸すり鉢	底	10	"	安土 桃山	160	図版18の8
68	中国青磁	胴	5	"	" "	162	
69	瀬戸平茶碗	口 縁	6	"	" "	166	
70	瀬戸すり鉢	胴	6	"	安土 桃山	167	

番号	名称	器形	部分	厚さmm	出土場所	製作時代	注記番号	備考
71	瀬戸平茶碗	平茶碗	胴	7	第1号柱穴	室安土桃山江	168	
72	黄瀬戸平茶碗	平茶碗		7	"	安土桃山江	170	
73	肩衝平茶碗	平茶碗		5	"	安土桃山	171	図版19の1
74	瀬戸平茶碗	平茶碗		7	"	安土桃山	172	
75	瀬戸平茶碗	平茶碗	口	6	"	安土桃山	173	
76	灰常滑	常滑		5	"	"	174	
77	灰常滑	常滑	胴底	9	第2号柱穴	室	111	
78	四常滑	常滑	底	9~12	"	室	112	第21図8
79	お三常滑	常滑	底	10	"	"	113	第21図11、図版18の3
80	常滑	常滑	底	9	"	"	114	
81	常滑	常滑	胴	10	"	"	115	
82	常滑	常滑	胴	8	"	"	116	
83	瀬戸濃灰	濃灰	胴	6	"	室鎌倉	117	
84	美濃灰	濃灰	緑	2	"	安土桃山	118	第21図10、図版18の4
85	瀬戸濃灰	濃灰	底	6	"	安土桃山	119	第21図9、図版18の5
86	瀬戸濃灰	濃灰	底	8	"	"	122	
87	美濃灰	濃灰	底	6	"	安土桃山	123	第21図13、図版18の6
88	瀬戸灰	灰	底	6	"	室	124	
89	瀬戸灰	灰	底	5	"	"	128	第21図14
90	瀬戸灰	灰	底	6	"	"	129	
91	瀬戸灰	灰	底	8	"	"	133	
92	瀬戸灰	灰	底	7	"	室	134	
93	中瀬戸	中瀬戸	底	4	"	"	137	第21図15、図版18の7
94	中瀬戸	中瀬戸	底	5	"	室	138	
95	中瀬戸	中瀬戸	底	5~9	"	"	139	
96	美濃灰	濃灰	底	6	"	"	141	第21図12
97	瀬戸平	平	底	6	"	"	142	
98	瀬戸鉄	鉄	底	6	"	"	143	
99	瀬戸鉄	鉄	底	8	"	安土桃山	144	
100	瀬戸鉄	鉄	底	5	"	室	145	
101	中瀬戸	中瀬戸	底	4	"	"	146	
102	中瀬戸	中瀬戸	底	3	"	"	147	
103	中瀬戸	中瀬戸	底	5	"	室	149	
104	中瀬戸	中瀬戸	底	2	"	"	150	
105	中瀬戸	中瀬戸	底	5	"	室	152	
106	中瀬戸	中瀬戸	底	4~7	"	"	153	
107	中瀬戸	中瀬戸	底	4	"	室	154	
108	中瀬戸	中瀬戸	底	5	"	"	155	第21図16
109	中瀬戸	中瀬戸	底	8	"	"	157	
110	常滑	常滑	底	12	第3号柱穴	"	177	
111	瀬戸祖母	祖母	底	12	"	安土桃山	178	
112	鉄平	平	底	5	"	室	179	
113	鉄平	平	底	5	"	安土桃山	183	
114	常滑	常滑	底	14	溝状遺構	室	88	
115	瀬戸燈	燈	底	7	外	安土桃山	91	第21図2、図版17の7
116	瀬戸燈	燈	底	5	"	"	92	第21図3、図版17の8
117	灰瀬戸	瀬戸	底	6	"	"	93	第21図4、図版18の1
118	瀬戸祖母	祖母	底	10	"	"	94	
119	瀬戸祖母	祖母	底	9	"	室	95	
120	平鉄	鉄	底	5	"	室	96	第21図5
121	鉄平	平	底	7	"	鎌倉	97	第21図7
122	鉄平	平	底	5~9	"	"	98	第21図6
123	瀬戸天	天	底	4	"	室	99	
124	瀬戸天	天	底	6	"	"	100	
125	瀬戸天	天	底	6	"	安土桃山	101	
126	瀬戸天	天	底	4	"	"	102	
127	瀬戸天	天	底	6	"	鎌倉	103	
128	香天	天	底	5	"	"	104	
129	鉄平	平	底	7	"	安土桃山	106	
130	鉄平	平	底	6	北区その他	江	185	第21図17、図版19の2
131	おろ	ろ	底	7	"	鎌倉	186	第21図18、図版19の3
132	常滑	常滑	底	11~16	"	"	187	
133	瀬戸鉄	鉄	底	5	"	安土桃山	188	
134	灰中	中	底	7	"	室	189	
135	灰中	中	底	4	"	"	190	第21図20
136	不美	不美	底	11	"	"	191	
137	不美	不美	底	10~13	"	"	192	
138	瀬戸濃	濃	底	8	"	江	193	
139	瀬戸濃	濃	底	7	"	"	194	
140	瀬戸濃	濃	底	10~14	"	江	195	
141	不水	不水	底	13	"	"	196	
142	不水	不水	底	5	"	安土桃山	197	
143	瀬戸祖母	祖母	底	7	"	室	199	
144	瀬戸祖母	祖母	底	7	"	安土桃山	202~204	


番号	名称	器形	部分	厚さmm	出土場所	製作時代	注記番号	備考		
145	灰	釉	皿	縁	5	北区その他	室	町	205	
146	灰	釉	皿	底	5	"	"	"	206	第21図19
147	中	国	青	磁	5	"	"	"	208	
148	瀬戸	鉄	釉	土瓶	6	"	安土	桃山	209	
149	中	国	青	磁	9	"	"	"	211	
150	瀬戸	鉄	釉	皿	5	"	安土	桃山	214	
151	瀬戸	壺	(水差し)	皿	6	"	安土	桃山	215	
152	灰	釉	皿	縁	5	"	"	"	217	
153	瀬戸	天	目	胴	6	"	"	"	218	
154	瀬戸	天	目	頸	4	"	江戸	(中期)	219	瑠璃釉
155	瀬戸	天	目	胴	6	"	室	町	220	
156	お	ろ	し	皿	7	"	"	"	221	
157	瀬戸	白	釉	皿	6	"	江	戸	222	
158	瀬戸	御	深	井	碗	5	"	"	223	
159	中	国	白	磁	目	3	"	"	224	
160	瀬戸	天	青	磁	目	5	室	町	225	
161	中	国	青	磁	底	9	"	"	226	
162	瀬戸	す	り	鉢	縁	7	"	"	227	
163	中	国	青	磁	縁	4	"	"	228	
164	中	国	白	磁	胴、底	3~5	"	"	229	
165	瀬戸	三	脚	付	大鉢	5	"	"	230	
166	瀬戸	灰	釉	茶	皿	7	南区その他	室	町	231
167	瀬戸	灰	釉	茶	皿	5	"	"	237	
168	瀬戸	灰	釉	茶	皿	6	安土	桃山	239	
169	中	国	青	磁	底	9	"	"	244	第21図22、図版19の7
170	中	国	青	磁	縁	5	"	"	245	
171	中	国	青	磁	底	8	"	"	246	第21図21
172	中	国	青	磁	縁	5	"	"	247	
173	中	国	青	磁	縁	5~8	"	"	248	
174	常	滑	壺	胴	10	"	室	町	252	
175	瀬戸	祖母	懷	壺	底	8	"	"	253	
176	瀬戸	祖母	懷	壺	底	10~14	"	"	254	第21図26
177	常	滑	壺	胴	11	"	"	"	255	
178	瀬戸	天	目	胴	6	"	室	町	256	
179	瀬戸	祖母	懷	壺	胴	6	"	"	257	
180	瀬戸	す	り	鉢	縁	8	安土	桃山	260	
181	瀬戸	祖母	懷	壺	胴	8	"	"	261	
182	常	滑	壺	底	11	"	"	"	262	
183	瀬戸	す	り	鉢	底	10	室	町	263	
184	常	滑	壺	(壺)	底	11	"	"	264	
185	瀬戸	祖母	懷	壺	胴	10	室	町	265	
186	瀬戸	祖母	懷	壺	縁	7	"	"	266	第21図23、図版19の4
187	常	滑	壺	底	11	"	"	"	268	
188	す	り	鉢	胴	7	"	室	町	272	
189	す	り	鉢	胴	8	"	"	"	273	
190	須	恵	器	胴	7	"	"	"	275	
191	瀬戸	祖母	懷	壺	胴	4~7	室	町	276	
192	瀬戸	台	付	壺	底	"	安土	桃山	277	第21図25、図版19の5
193	瀬戸	祖母	懷	壺	胴	8	安土	町	278	図版19の6
194	常	滑	壺	底	10	"	"	"	279	
195	瀬戸	祖母	懷	壺	頸、胴	7	室	町(桃山)	280~282	
196	灰	釉	皿	底	3~6	"	"	"	283	
197	瀬戸	天	目	胴	6	"	室	町	285	
198	瀬戸	祖母	懷	壺	胴	7	"	"	286	
199	常	滑	壺	底	10	"	"	"	287	
200	瀬戸	灰	釉	皿	縁、胴	5	室	町	289	
201	瀬戸	灰	釉	皿	縁、胴	"	"	"	292	
202	鉄	釉	壺	底	7	"	安土	桃山	294	
203	美濃?	鉄	釉	大鉢	縁	7	"	"	297	
204	瀬戸	鉄	釉	壺	底	5	安土	桃山	298	
205	お	ろ	し	皿	底	6	安土	町	299	第21図24
206	瀬戸	平	茶	碗	胴	5	"	"	300	
207	瀬戸	す	り	鉢	縁	6	"	"	301	
208	鉄	釉	土瓶	鉢	胴	5	"	"	302	
209	三	脚	付	大鉢	縁	6	"	"	303	
210	白	釉	皿	縁	4	"	安土	桃山?	304	
211	瀬戸	天	目	縁、胴	5	"	室	町	308	





## 第V章 所 見

唐沢城址の発掘は、昭和50年度県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査である。本調査で得た2、3の問題点を述べて所見としたい。

1) 唐沢城の占地について。本城址は天竜川右岸段丘上に突出した半島状の台地崖縁上に占地する平山城である。

2) 土塁。現在残っている土塁は、主郭部の北側内堀に面した所から東へ22m間に過ぎない。この主郭は古くは畑地であったのを昭和28年上流から水を引いて開田したもので、周囲に巡っていた土塁を取り去ったと言われている。また南側崖縁には僅かばかり高い箇所があるが、これなど土塁の面影をとどめているものである。土塁の型式は、小室栄一氏の分類によるとNo.12  榎下城北崖にその例を見る。当城址には主郭は勿論のこと、他の郭にも内側に設けられていたものと思われる。土塁の基底幅を現在測定出来ないで、高さ・幅を推測することが困難となっている。

3) 堀。今回の発掘調査では外堀に当たる箇所が工事にかかるので調査を行なった。外堀は中央部と考える箇所西の木戸が設けられていたので、その箇所を境に南北の河岸段丘まで堀られている堀を、主要箇所の断面を調べる方法で調査を行なった。その結果、木戸の北側の堀型は、 とする西側に段のある堀型であった。南側には段は見当らなかったため、堀の外側に土塁が存在したとすると、小室氏の言う5型式か6型式の堀ではなからうか。これらの型式は戦国的道型をもつ堀と思われる。内堀は地形的に  逆に西側の高い型式である。

4) 堀底道。内堀は北側の道があり古くは堀底を通っていたと伝えられているところより古い様相が窺われる。外堀は堀底道があったかどうか不明である。

5) 帯郭。主郭の北斜面に窺われる。内堀の下斜面から東方に突出した尾根先の北側斜面までのびている。その幅3～4mで主郭の北側土塁上まで45度近い急斜面であり、防禦には十分である。東側に突出した尾根には帯郭と同様な郭が2箇所設けられている。こうした例は、駒ヶ根市赤須城址、飯島町鳥居原トヤゴ城址、松川町舟山城址等に認められるところである。

6) 大手口。城址には大手、搦手が存するが唐沢城址には今までこれと言った出入口が明らかでなかったが、今回の調査で出入口が確認されたことは大きな発見と言わなくてはならない。これを指して大手口とするのはどうかと思われるが、ここでは一応そうした名称を付しておく。遺構配置図にみられる様に外郭の北地区と南地区を分割する部分に堀が切れた箇所が発見された。この事実は、この箇所の西に外郭が存しないかぎり、その位置は動かないと考えざるをえない。唐沢城以外の城で私が調査した伊那市荒城の例など唐沢城の例と合致する。また主郭に通ずる道もこの箇所以外に求められない。恐らくここを通過して主郭に通じたものであろう。主郭の入口は、ここからでは南隅に当たる状態であるが、現在内堀が埋められている以上、主郭部の確実な出入口は示す事ができない。

7) 建物址。今回調査した外郭は、出入口の道路を境に北地区と南地区とになるが、これが外郭全体であるかどうかということになると不確定である。このことは主郭1に対して外郭が3～4という大方の比率からすると、南北地区を合せても1.8～2.0であり、まだこの倍位の外郭があっても良いと見る向きもある。今回発見された2郭の建物址をもって外郭全体を受けとめるのは早計と考えられるので、差し控えたい。北地区発見の柱穴群は堀立建物址であることは確かであるが、如何なる性質を持った建物址であるか明らかにできない。柱間々隔からして住宅建築としては不適當な建物である。また、この地区の内に米・大豆・粟等の穀物が貯蔵されていた事実は、城としてばかりではなく、当時の民衆の食生活の究明に大きな意味を有すると言う点で重大な発見であった。

この貯蔵施設附近にも柱穴が認められるので穀倉としての建物址として注目に値する。残念なことであったが、この地区も完掘ができなかったため、郭全体の姿から論ずることができなかった。また、南地区の郭から方形で竪穴式の住居址が3軒も検出されているが、これはいずれも室町中期の住居址である。土師器を出土する住居址の如く竪穴内に4柱という形の住居址ではなく、壁辺に小柱穴と、壁外に柱穴を有する住居である。内には炉を持たなく、しかも床面が柔らかな状態の住居址であることに注目したい。このことは、住居内に厚く藁・草等をひいていた住居址であろうと考えられる。建物も、勿論壁外柱穴を有した屋根下緊梁の切上造りの堀立建築ではなかったか。その他堀立建物址は柱間々隔上、厩屋のようなものであったのか、倉か納屋のようなものであったのか判然としない。絵巻物にみられる都会風の建築ではなく、地方農村的な建築ではなからうか。まだ主郭の調査がなされていないので、その主要部分の建物の様子を知ることができない。

8) 唐沢城の附近の城址。

①本郷城(飯島城とも言ふ)。本城は天竜川の第2段丘上子生沢に面した台地上に占地している。南と東は段丘縁に面し、土塁はめぐっていないが、西と北には内堀と外堀がめぐっている。また、西と北には原形に近い土塁が残っている。城の型式から戦国築城と考えられる城址である。本城の東、天竜川に接して古城という小規模の二重の堀をめぐらす城址が現存している。この城は、飯島氏が初めに築城した城と考えられる。築城の年代は明らかでないが、本城(飯島城)が戦国城郭型式で拡張された痕跡をとどめるので、本城が築城するまでは使用された

ものであろう。また、本城が築城されても出城として使用されたかも知れない。昭和48年 153号線国道バイパス工事に当り、南羽場地区を発掘したところ、室町時代の住居址、柱穴址、道路敷と考える敷石址や相ノ沢に面して2本の堀が発見されたことにより、城主の居館址として注目されるにいった。

②岩間城。飯島町岩間地区に所在する平地城である。岩間氏は尊卑分派によれば、船山の城主、片桐源八の三男片桐二郎太夫寿綱（信州岩間飯島氏の祖）となっている。岩間氏は飯島氏と同様飯島の地において地方豪族として勢力を張っていたものである。現在城郭らしき遺構は見受けられないが、地名には、城・入口・町谷・井戸端・垣外・小丸・大丸・薬師畑・東谷寺等があり、岩間氏の居城を物語るものである。城郭は1.1ヘクタール・町谷1.5ヘクタールの面積が地名に残っている。城と言われている地域は一段と高くなっている。町谷地区は城と言われている地区より一段と低い。また、北と南には湿地帯があり、当時の生産地帯を思わせる。昭和41年城の地籍にあった空堀巾、約10m深さ約2～3mを埋めて水田とした。現在、堀の北限が本沢の断面にみられる。その外の堀は不明である。入口という地名は城の西木戸があったことを物語ってくれる。唐沢城で出土した炭化穀物と同様な炭化穀物が地下式貯蔵庫から発見されたとの話である。初期岩間城と戦国の岩間城との改変があったか否かは、明らかでない。

③トヤゴ城。唐沢城と同じく天竜川右岸段丘上、与田切川の合流地点に突出した半島状台地に占地する城郭である。空堀が二重に巡り主郭の一部には僅かに土塁が面影をとどめている。堀底道などの存在から戦国城と考えられる城址である。その外天竜川段丘上には、松川町の大島城、上片桐の船山城、駒ヶ根市赤須城等唐沢城址とまったく同型式をもった城郭が見受けられる。

9) 陶磁器については、本文の中で詳しく述べてあるので、それを参照してもらいたい。大方は室町期のものであることからして、主体は室町時代と考えるべきである。また、主郭地区からは昭和28年の開田の時、室町・安土桃山時代の天目茶碗他、数点の陶器片と古銭（中国銭）が出土している。

10) 唐沢城の存在期間について。この問題は大変に困難な問題であるので、ここでは結論的なことではなく、研究経過を述べてみたい。出土器物からして見ると、鎌倉期では山茶碗、香炉など優品が検出されているところより、鎌倉期に始まりを求めることができると思う。鎌倉期の領主は今日迄明かでないが、鎌倉時代に飯島氏は石曾根氏、田切氏の諸豪族を支配していた様であるから、鎌倉期は石曾根氏或いは田切氏が領していたのではなかろうか。室町時代中期は、出土遺物も一番多い時期であるところより、唐沢城の基礎が確立した期ではないかと考えたいが、現在のところ、主郭及び外郭の北地区が、桃山時代の遺物が室町時代より僅か多い所から現在の城址の形までには至らなかったと考えられる。以前の城郭がどの程度の規模であったか不明であるが、上杉氏の配下唐沢氏が入ってから、戦国城郭に改変したものと考えられる。

唐沢城の報告書作成に当っては、地元の宮下静男氏、信州大学農学部松沢教授、氏原・俣野助教授、学生小林喜美江氏、瀬戸市窯業民俗資料館長宮石宗弘氏の献身的御支援に対して心より感謝の意を表するものであります。編集は飯島町教育委員会伊藤修氏が当たった。（調査団長 友野良一）

## 自然遺物と鉄鎌について

### (1)農作物穀粒遺体について

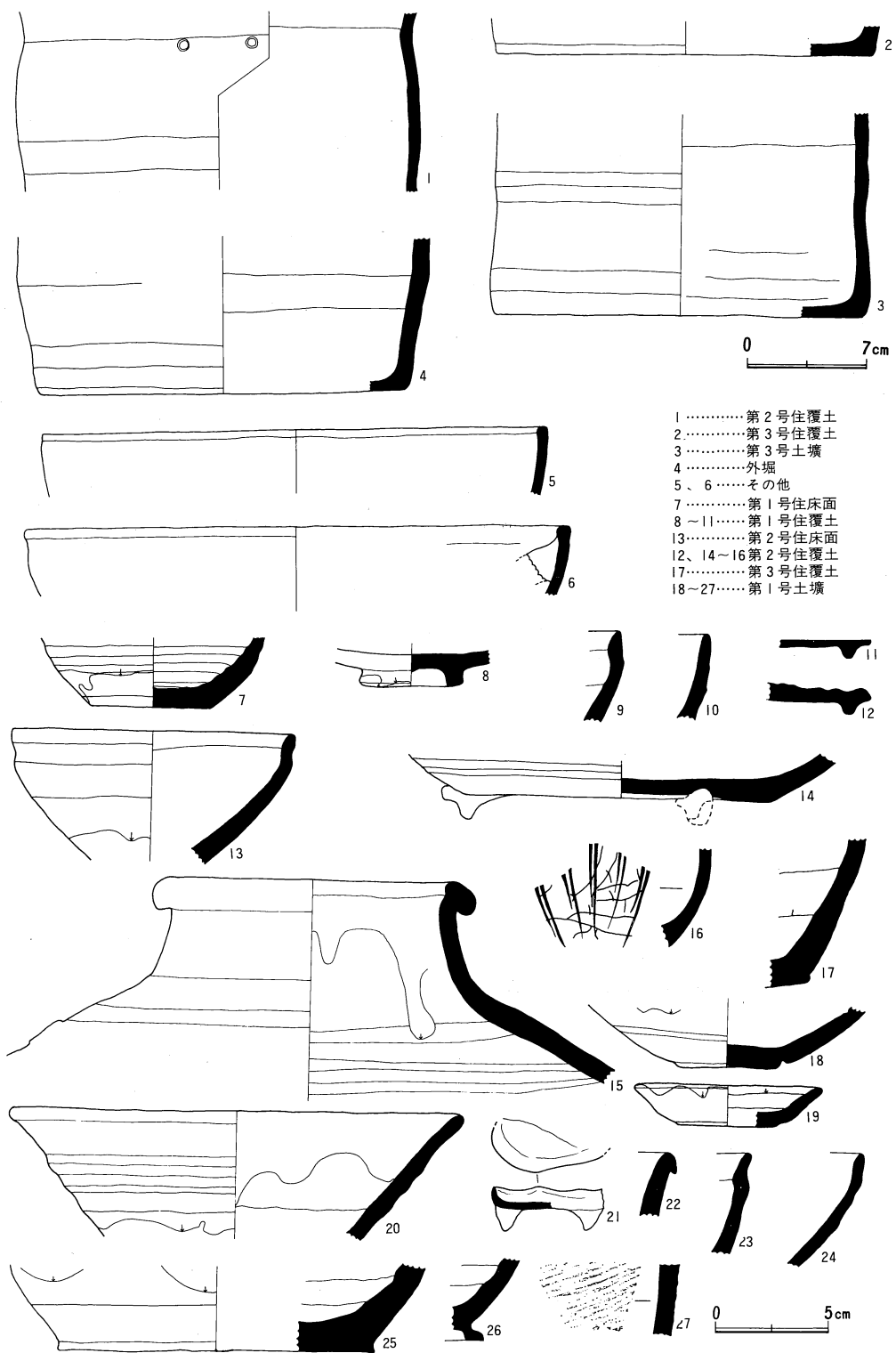
(1)その出土状況をみるに、第5号土壌は、おそらく穀物貯蔵庫の類であったと考えられる。ローム層を掘り下げた土壌に、長方形の箱形の貯蔵庫を設置し、これに穀物を収納し、蓋をし、その上に重しの石をならべて保存したものであろう。これによって鼠害なども防ぐことができ、完全に保存されたであろう。第2・3号住居址、第1号土壌より粳米が塊状にかたまって出土したというのは、おそらくは布袋などに入れて貯えられていたものであろう。保存に最もよい粳米の状態は自然である。

(2)これらの穀類は、いうまでもなく主食に用いられたものであろう。玄米にアワを混ぜてのアワ飯。大豆は味噌に作られたであろう。おそらくはソバは粉に挽いて、焼餅にしてふだんの食とし、ごちそうにはソバ切りを作る。そのソバを打つときのつなぎ粉に、小麦の粉を用いる。小麦は焼餅をふだんの食とし、ごちそうにウドンを打つといったように用いられたものであろう。出土したものの量的に多いのが、米・大豆・アワであり、小麦・ソバが少量であるということ、おのずから、当時の主食の一般の貌を語っているものであろう。

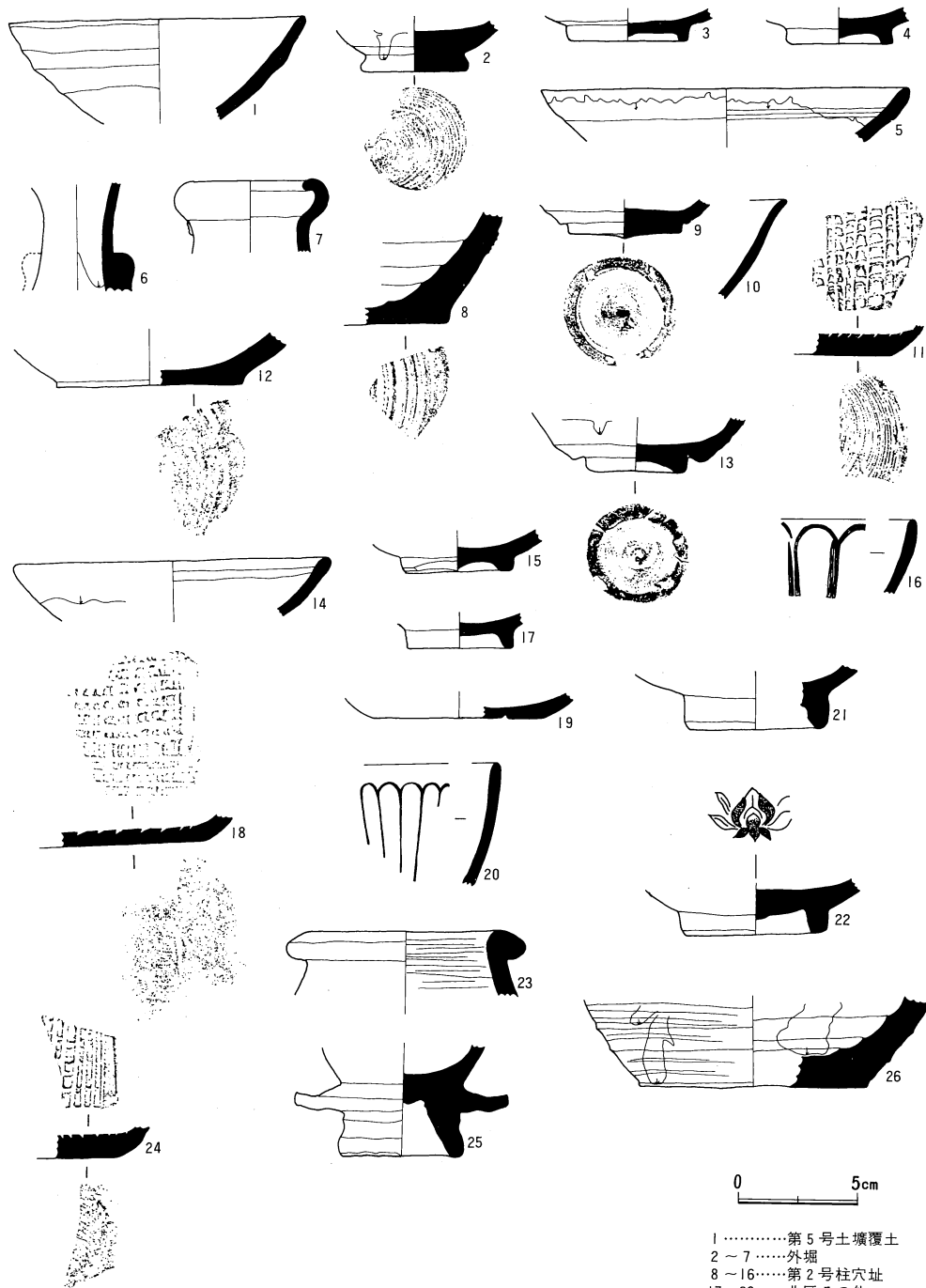
### (2)鉄鎌について

(1)第2号住居址出土の鉄鎌は、茎（なかご）のついた大型のもの。そのなかごの先端を円みを帯びた姿に曲げ柄に目釘をうって固定させる時の孔としている作りは、江戸時代以降、つい近年までつづいた鎌の作りと一致しており、鎌の刀身の背が厚く刃先に向い順次薄くしている鋼を中身にし、その内側に軟鉄をつけた刀のような鍛え方をした厚鎌の作りということは、強く振り刈りするにも堪え、また、手づかみに刈る場合にも活用されるものである。この鎌に関連して、出土した小型の砥石3点のうち、2点はおそらく鎌を砥いだものと推定される。その磨擦面の姿をみるに、鎌の刃先を向うに向け、砥石で静かに磨ぐという方法であったと推測されるのである。

(2)鉄鎌の表面・裏面にワラ・カヤなどイネ科の植物の茎葉と思われるものが錆びつき、その姿をのこしている。これは恐らく、この鉄鎌がそれらのもののなかに埋れ、圧が掛った状態で長くあった結果と考えられる。この事は、この住居では、ワラ・カヤなどを地面に厚く敷き、その上にネコ・ムシロなどを敷いて、日常の起居の場とする土座住居であったことを語るものではなかろうか。そのワラ・カヤなどのなかに紛れこんでいた鉄鎌がこれではなかろうか。もしそれであったとすれば、唐沢城の場合、その下級武士の生活の一面を語るものとして注目される。  
(向山雅重)

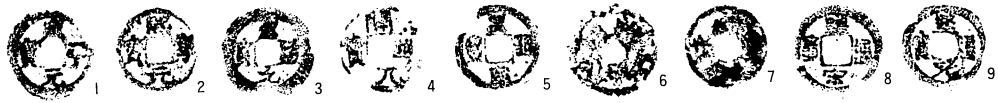


第20図 陶磁器 (1~6 1:4、7~27 1:3)

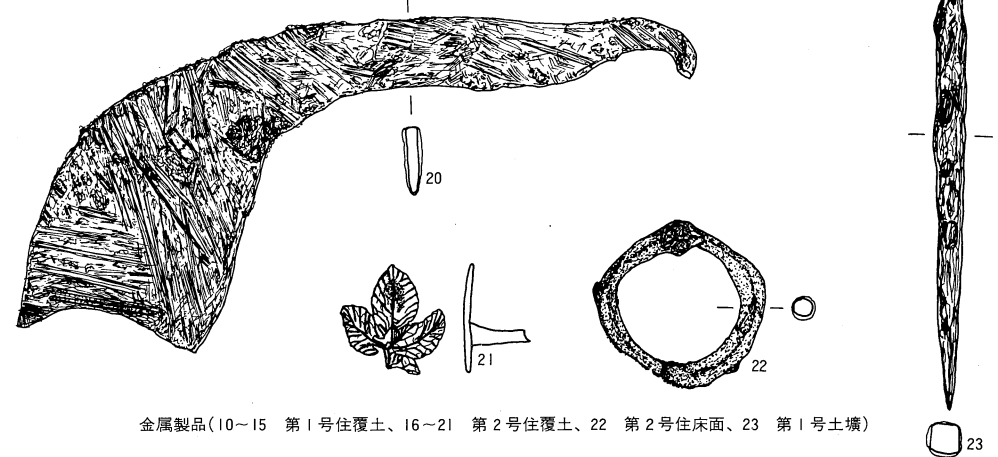
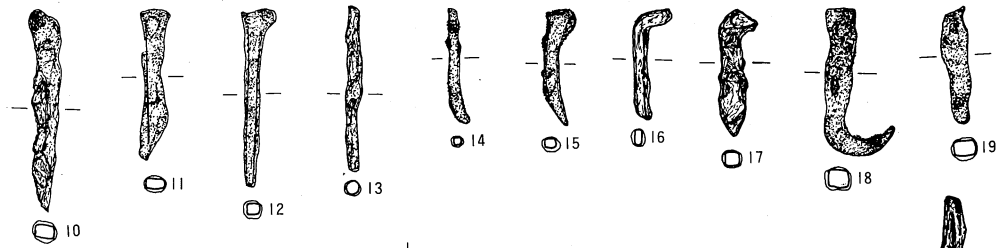


第21図 陶磁器 (1 : 3)

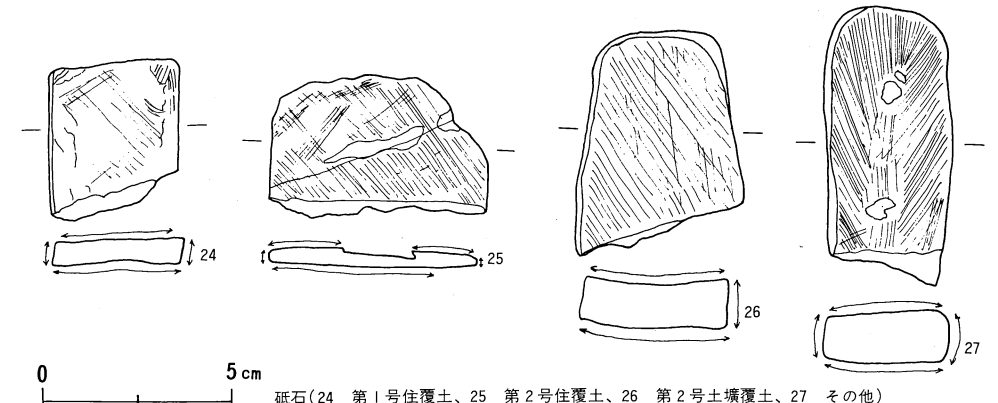
- 1 ..... 第5号土壇覆土
- 2 ~ 7 ..... 外堀
- 8 ~ 16 ..... 第2号柱穴址
- 17 ~ 20 ..... 北区その他
- 21 ~ 26 ..... 南区その他



古銭(1~5 第2号住覆土、6~7 第5号土壙覆土、8 第1号柱穴、9 北区その他)



金属製品(10~15 第1号住覆土、16~21 第2号住覆土、22 第2号住床面、23 第1号土壙)



砥石(24 第1号住覆土、25 第2号住覆土、26 第2号土壙覆土、27 その他)

第22図 古銭、金属製品、砥石 (1 : 2)



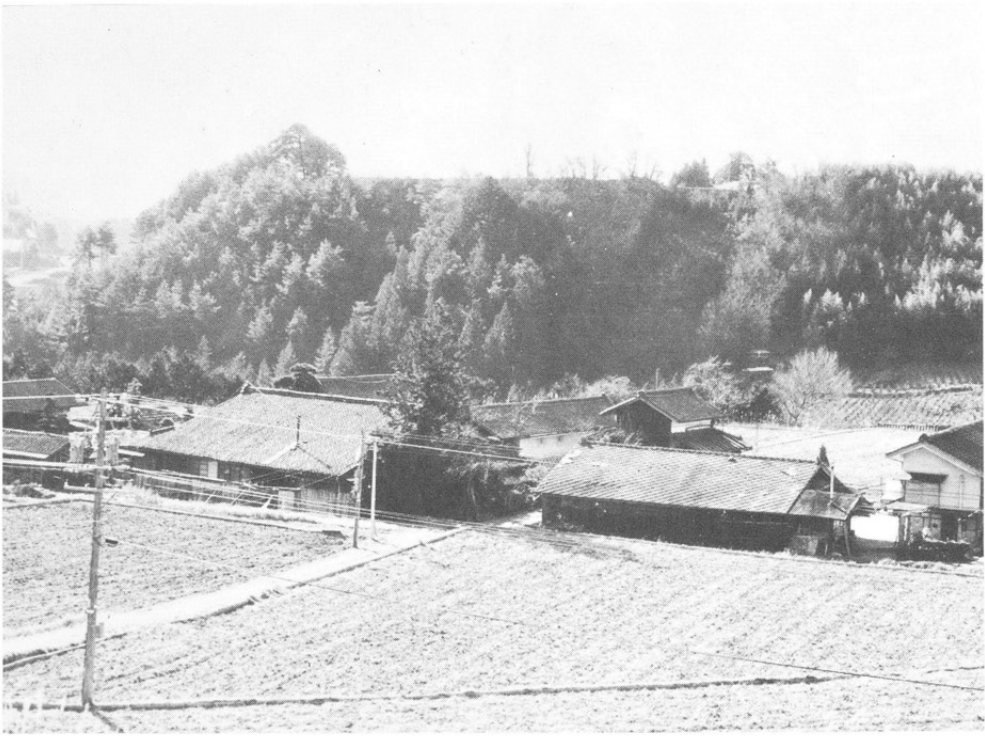




遠景（東より）



遠景（上の写真のアップ）



遠景（北より）



唐沢城より天竜川を望む

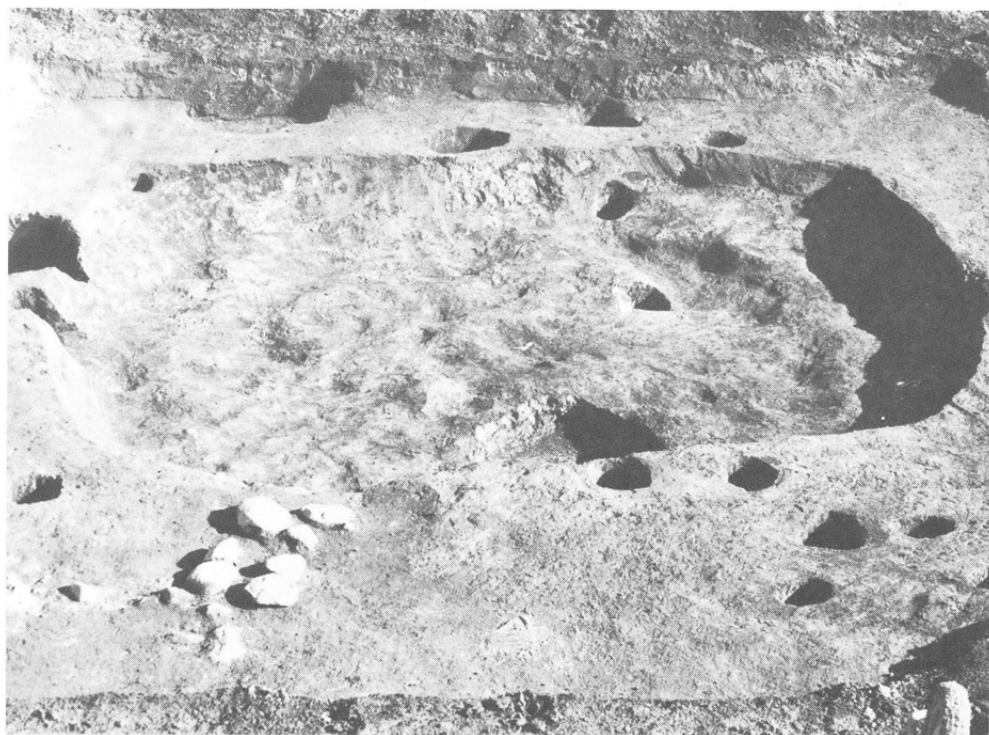


主郭部・南区

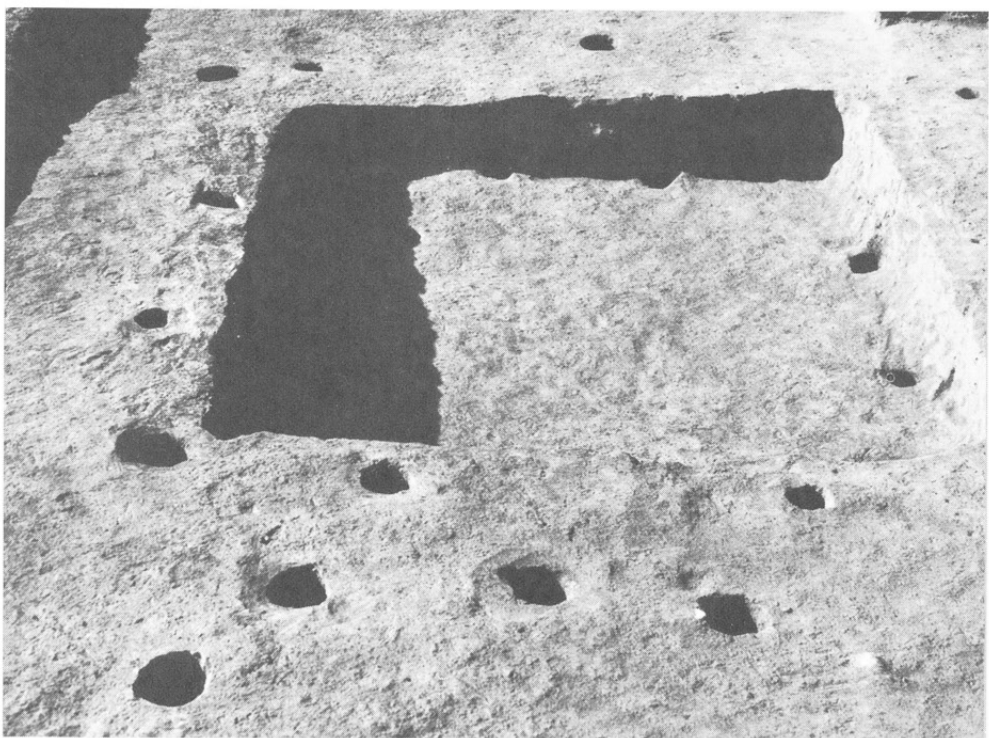


北 区





第1号住居址



第2号住居址



第3号住居址・第3号土壙



第1号土壙とその付近





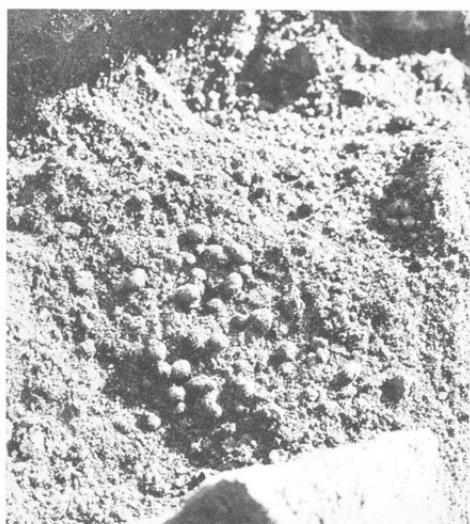
第2号土城



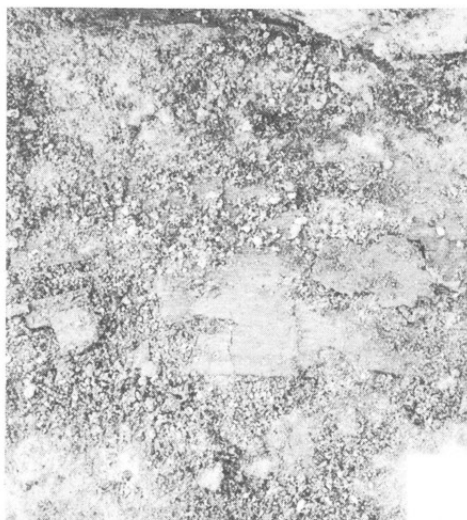
第4号土城



第5号土壤



炭化穀類出土状態



炭化木材出土状態



第1号柱穴址



第2号柱穴址(第3住、第3土壇、配石を含む)



第3号柱穴址



配石





集石



溝状遺構



外堀(北より)



断面調査(No.1)



断面調査(No.3)



記念撮影



外堀断面調査

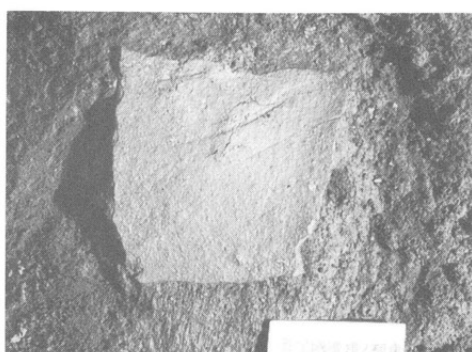


測量風景

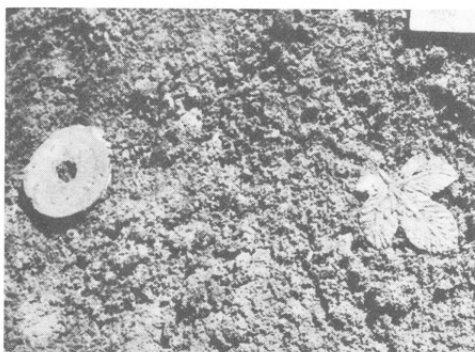




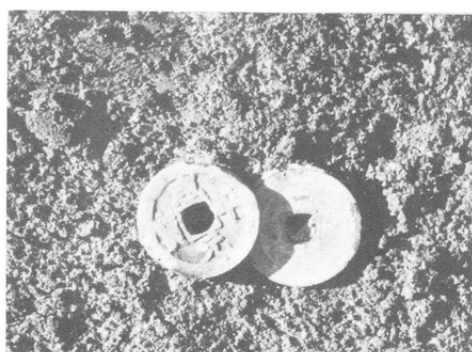
第1号住居址出土陶器



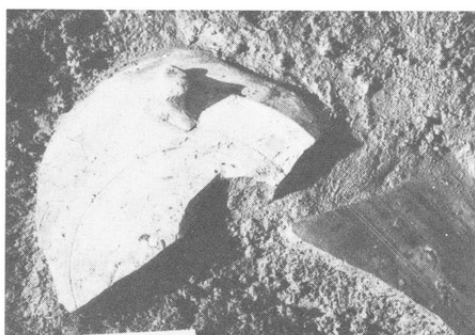
第1号住居址出土陶器



第2号住居址出土古钱、装饰品



第2号住居址出土古钱



第2号住居址出土陶器



第5号土壙出土古钱



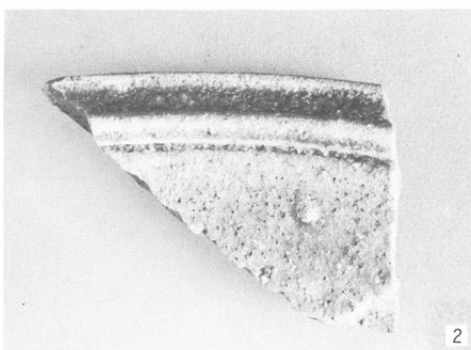
南区出土陶器



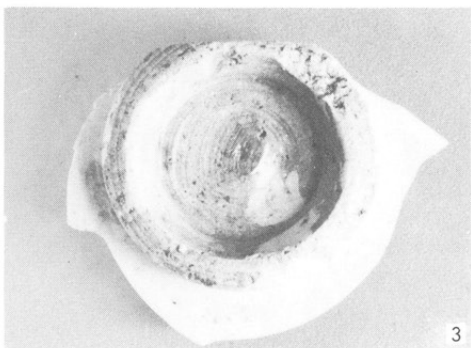
南区出土陶磁器



第1号住床面



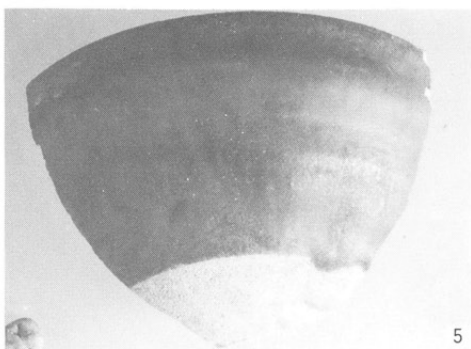
第1号住覆土



第1号住覆土



第1号住覆土



第2号住床面



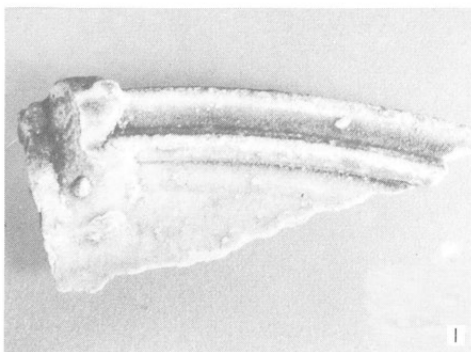
第2号住覆土



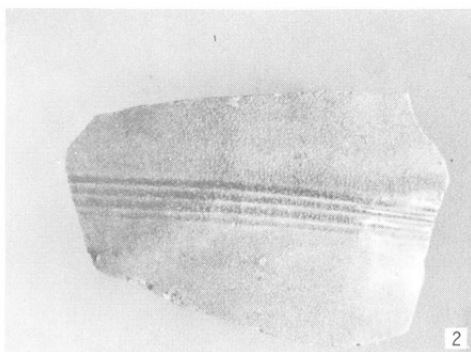
第2号住覆土



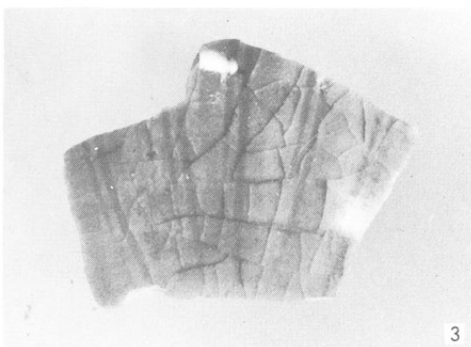
第2号住覆土



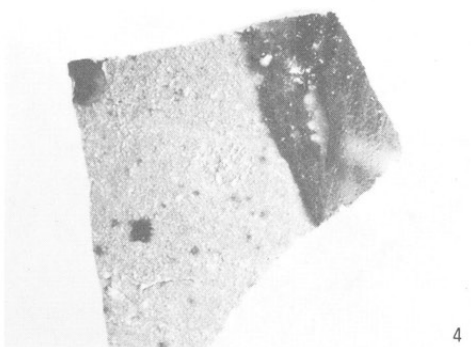
第2号住覆土



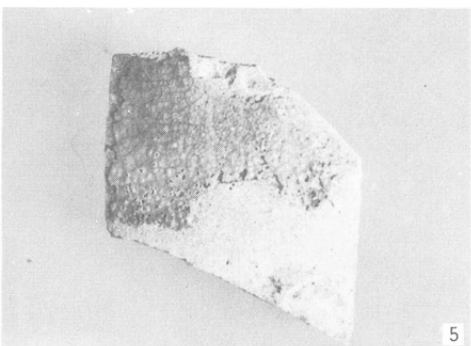
第2号住覆土



第2号住覆土



第3号住覆土



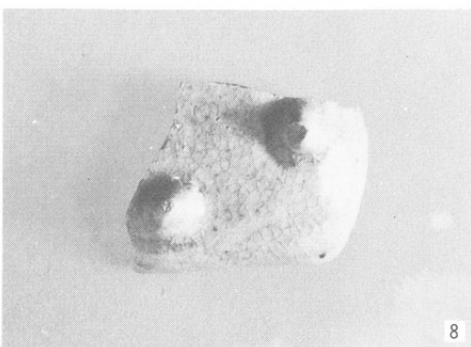
第1号土壙覆土



第1号土壙付近



第1号土壙付近



(No.7の底部)



第1号土壙付近

1



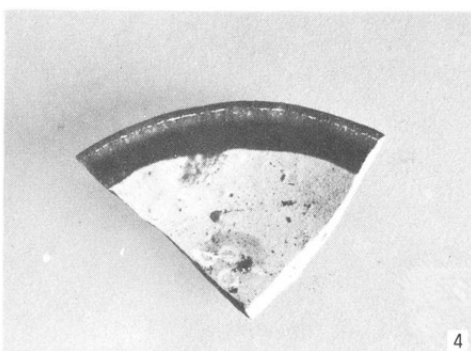
第1号土壙付近

2



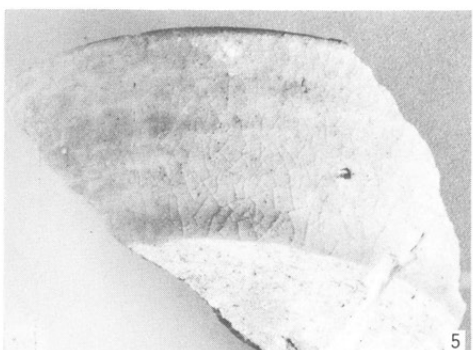
第1号土壙付近

3



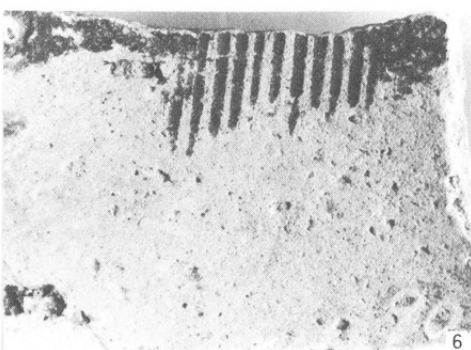
第1号土壙付近

4



第5号土壙覆土

5



第5号土壙覆土

6



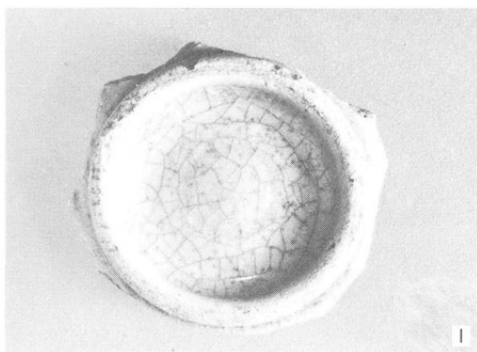
外 堀

7



外 堀

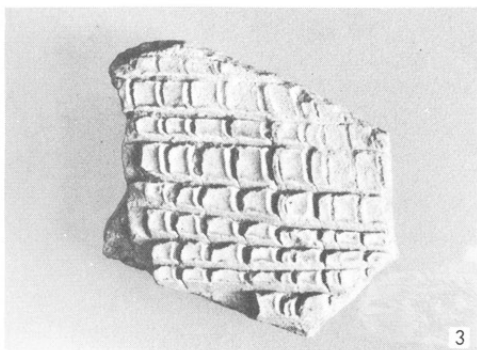
8



外 掘



外 掘



第 2 号柱穴址



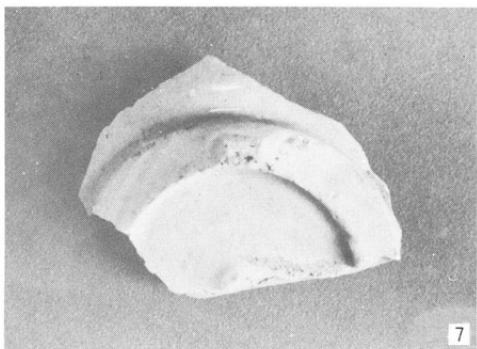
第 2 号柱穴址



第 2 号柱穴址



第 2 号柱穴址



第 2 号柱穴址



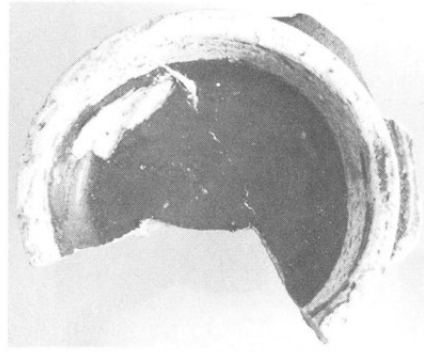
第 1 号柱穴址





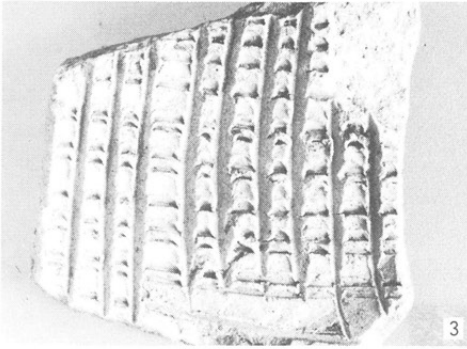
1

第1号柱穴址



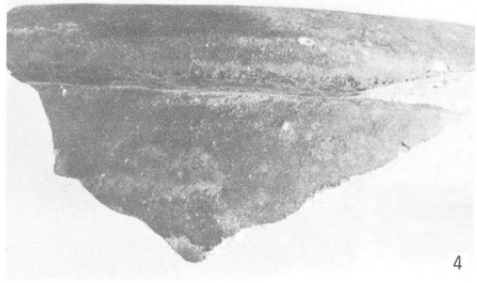
2

北区その他



3

北区その他



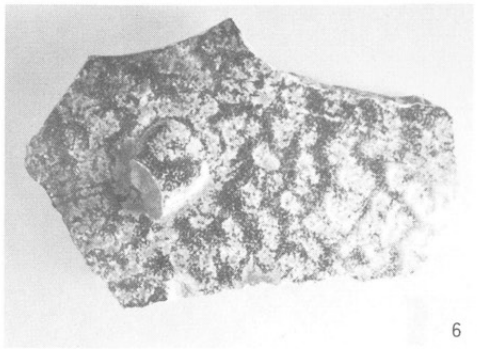
4

南区その他



5

南区その他



6

南区その他



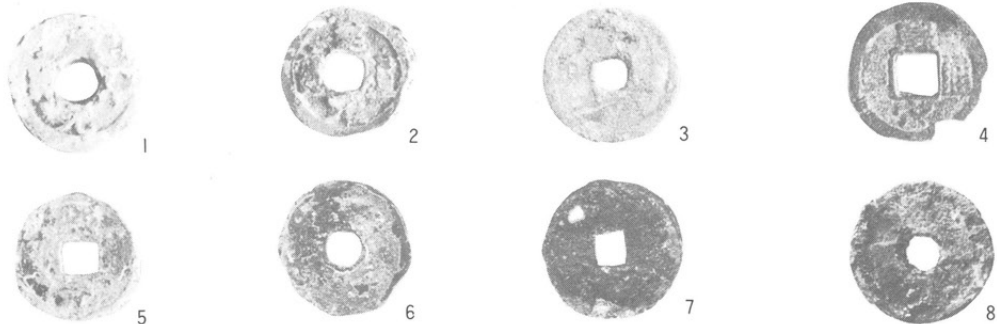
7

南区その他

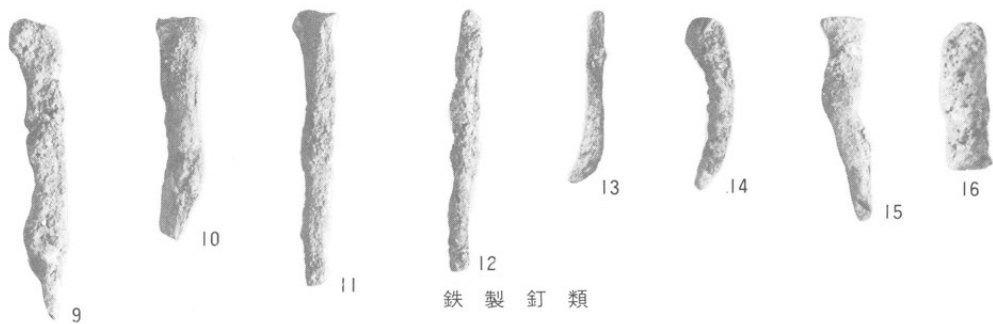


8

(No. 7の底部)



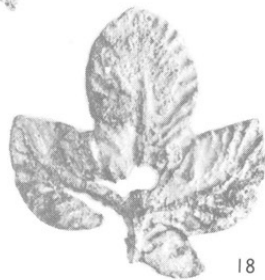
古 錢



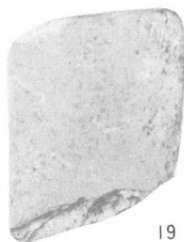
鐵 製 釘 類



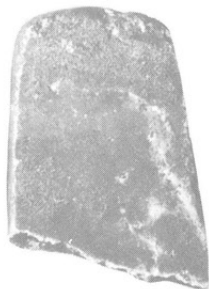
鐵 製 鎌、裝 飾 品



18



19



20



21

砥 石

## あ と が き

群雄割拠して騒乱に絶え間なき中世の時代には、城郭はその地域の威厳を表徴し、又外敵防御の施設として、築城には民衆の奉仕と数多くの犠牲があったことであろう。唐沢城は天竜河岸に点在する城の中で立派な風格を整えていたと思われる。城の歴史や発掘調査の内容は本文に記録されているが、永年にわたる数々の侵食作用や、又一面開拓等により往昔の構造や佛は実在する遺構や出土品により検索するしかない。

今回の発掘調査により、大地の中に永遠に埋れていた城郭の一部が掘りおこされ記録として保存出来たことは幸であった。

昭和51年3月10日

飯島町教育長 織 田 正 巳

### 唐 沢 城

〜〜緊急発掘調査報告〜〜

昭和51年3月15日 印刷

昭和51年3月20日 発行

発行所 長野県上伊那郡飯島町教育委員会  
南信土地改良事務所

印刷所 伊那市 小松総合印刷株式会社



